ヒール最高

猫美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヒール最高

【Ｎコード】
Ｎ０８１５Ｚ

【作者名】
猫美

【あらすじ】
おかしい。会社帰りの電車の中だったハズなのに。
気がついてみれば赤ん坊。
ああ・・・転生モノってヤツですか。
ストンと納得してしまう。そこから始まる第二の人生。
魔法のあるファンタジーな世界じゃないですか。
ふっふっふ。となれば、当然ヒールですよ。ヒール。
攻撃魔法？興味ないですな。はっはっは。
／表現が苦しかったとしても一人称の視点を切り替えながら展開し

ていきたいと思っています。頭の中身を書き出すのに慣れていない為、どうか気長におつきあいいただければと思います。

ギャン泣きした日

記憶がはっきりとしないのだが、あまりの息苦しさと頭痛に思わず泣いた。
大声を出して泣いた。
ギャン泣きって奴だ。
我ながら、恥ずかしいのだが・・・どうにも苦しかったのだ。
頭痛も、締め付けられるような頭痛で泣いた。

いやいや。
ほんと、もうスゴイんだって。
思わず大の大人がギャン泣きするレベル。

大声を出して泣いたので、ちょっとすっきりした。

周囲を見回すが・・・どうにもうまく見回せない。
自分の状況が理解出来ない。

茶髪の看護婦さんが覗き込んで来る。
看護婦さんが何かを喋っているのだが、理解が出来ない。
「なんですか？」
と聞いたつもりなのだが、きちんと喋れたのか怪しい。
耳の調子が何やら変だ。
自分の状況が理解出来ない。
理解出来ないのだが、猛烈に眠い。
フェードアウト。

状況を整理しよう。
どうやら、赤ん坊らしい。

あまりの事に、頭の中が真っ白になったが、事実は事実として受け止めた。
夢なのかと何度も疑ったが、日常が連続しているので、事実のようだ。

ああ、転生モノって奴かと、変な理解をした。
見た感じ、ＳＦモノって訳では無さそうだ。
どちらかというと、ファンタジー系。
魔法の有無は未確認。

相変わらず、周囲の人が何を喋っているのかは解らないが、隣に横たわっている可愛らしい人が母親のようだ。
ちょっと嬉し恥ずかし。
見つめられると照れる。
茶髪なんだけど、日の光が当たるとキラキラと輝いて、実に綺麗だ。

前世（？）の最後の記憶は、仕事帰りの電車の中だ。
珍しく席が空いていたので座ったら、沈み込む座席のあまりの気持ちよさに眠ってしまった。
そこから先の記憶が無い。
事故にでもあって死んでしまったのか、脳卒中でも起こしたか。
まぁ、考えた所で、寝ている最中に起こったことだ。
意識不明で集中治療室に運び込まれ、身体からは各種ケーブルが延びている状態なのかも知れないが、解らないモノは解らない。

心配してもどうにもならない。
ならば・・・取り敢えず寝よう。
考え事をしていると・・・とかく眠い。
フェードアウト。

あれから数日経った。
相変わらず、何を言っているのか解らない。
解らないが、母親は可愛らしい。
父親は・・・ちょっと厳ついが、自分を見てデレデレに蕩けていた。
どうやら、良い両親の元に生を受けたようだ。

さて・・・日がな一日、暇で仕方がない。
会話も出来ないし、そもそも、動くこともままならない。
母親とお医者さん、看護婦さんの会話をじ～っと聞いてるくらいか、
自分の今後の展望について考えるくらいだ。
まぁ、展望を考えると言っても、どういう世界なのかが解らないので何とも言えない。
社会人になって、学業から解放されて久しいのだが、また、1からやり直しかと思うとげんなりする。
あの時、こうしていれば・・・という後悔に対し、やり直すチャンスを得たのだ。と考えれば、案外悪くない。
そういう考え方が出来るのも、前世の記憶があるからな訳だが・・・

ふと、心配になるのが、この前世の記憶って奴はいつまで残っているか？と言うことだ。
無くなっても困ることはないんだろうが、あると便利に違いない。
消えないといいなぁ。

それにしても、会話が出来ないというのはもどかしい。
赤ん坊という奴は、どうやら身体の部位をうまくコントロール出来ないから喋れないようだ。
実にもどかしい。
喋ろうと思うと、「うー」とか「あー」になってしまう。
とか考え事をしていると眠気が襲ってくる。
まぁ、逆らう理由もないので寝るとしよう。

フェードアウト。

ギャン泣きした日（後書き）

Twitter　@nekomihonpo

発声記念日

2歳になった。
日々、訓練を重ねたお陰で、喋れるようになった。
初めて「とうさま、かあさま」と喋った時、すっごい喜びようで、もみくちゃにされた。
まだまだ舌っ足らずではあるが、意思の疎通が出来るというのはスバラシイ。
まだまだ単語が解らないが、地道に憶えていくしかないだろう。
ありがたいことに文法は日本語に近い。
文字は、まだ解らないが・・・中国語みたいだと大変だなぁ。
くらいに楽観視している。

自分の名前は、ウィル・ランカスター。
ランカスター家の長男だ。

母親は、リリーレルマ・ランカスター。
可愛らしい系のおっとり美人。
授乳の時、気まずかったのだが、コチラが一方的に気まずいだけだ。

父親は、ウィンザー・ランカスター。
見た目は厳ついが、母親や私に対してデレデレに蕩けるあたりのギャップが酷い。
公務員という表現が正しいのかは解らないが・・・公務員のようだ。
お陰で、良い暮らしをさせて貰っている。
・・・他と比較したことがないので解らないが、少なくとも、お手伝いさんの居る家庭は一般以上貴族未満だろう。たぶん。

ファンタジー系の転生モノで確定のようだ。

ケガをした時に、母親が治癒魔法を使ってくれた。
いいね。治癒魔法。スバラシイ。
まだ、世界情勢とかは解らないが、治癒魔法を憶えて損はないはずだ。
ファンタジー系ってことは、ＲＰＧみたいな世界観ってことだ。
治癒魔法至上主義とでも言おうか・・・ＲＰＧでとにかく優先すべきは治癒魔法だ。という偏った考え方をしている。
いいぞ。治癒魔法。
回復にお金が掛からない。
つまり、装備にお金が回せるんだ。
魔法というと、攻撃魔法に目が行きがちだが、私は断然治癒魔法だ。
死ななければいいのだ。
・・・おっと、ついつい暴走してしまった。
そんな訳で、治癒魔法には一方ならぬ思い入れがあるので、がんばって使えるようになりたいと思う。
治癒魔法の才能があるといいなぁ。

発声記念日（後書き）

Twitter @nekomihonpo

発声記念日のリリーレルマ（母親）

ウチの子は、ちょっと他所とは違うらしいの。

お母様から、
「子育ては大変よ。夜泣きで夜も寝てられないんだから」
とか、
「男の子は大変よ。目を離すとすぐにやんちゃするんだから」
とか・・・散々脅されていたのに・・・夜泣きらしい夜泣きを経験したことがないの。

まさか、私が気がつかずに寝ていたの！？と心配になったのだけれど、ノイナも夜泣きを聞いたことがないっていうし。
夜泣きもさることながら、昼間もあまり泣かないの。
あまり・・・という表現が控えめ過ぎるくらい泣かないの。

あまりにもおとなしいので、心配になってお医者様に相談したのだけれど、

「心配のしすぎですよ、ランカスター夫人。
お子さんは順調に育っていますよ」

と笑顔で言われてしまって、喜んで帰ってきたのだけれど・・・ウチの子は大人しすぎるのではないかしら？
ノイナに聞いても、

「ウィル坊ちゃんは賢い子です。
こちらの言っていることは理解しているようですし、ダメと言っ

たことは守っているように見受けられます。
　確かに、ちょっと静かな感じは致しますが」
なんてことを言うし。賢い子なんて言われてしまって、思わず嬉しくなって頬が緩んでしまったわ。

それにしても、子供って不思議。
何を言っているのか理解しようとしているのか、じ～っとこちらを見つめてるの。
こちらが気がついて尋ねてみると、
「ん？」
って首をかしげて・・・もう可愛くて可愛くて、思わずだっこしてしまうわ。

不思議と言えば、不思議な遊びをするのね。
部屋の隅の方で、
「あー」
とか
「うー」
って言っていたかと思うと、
「あーえうぃううぅーおあおー」
とか呪文みたいなこと言い始めるし。
ノイエに聞いても、
「初めて聞きました」
って言うし。
あれは何なのかしら？
可愛らしいからだっこしてしまうのだけれど。

もうすぐ2歳になろうかという頃に、ウィルがしゃべってくれたわ。

もう嬉しくて嬉しくて・・・ウィンなんか、もう大喜び。
「とうさま、かあさま」
なんて可愛らしい声で呼んでくれて、ウチの子は天使なんじゃないかって思っちゃった。

でも、いきなり、
「とうさま、かあさま」
なんてしゃべったので、ノイエも驚いていたわね。

ウチのウィルは知識欲の塊ね。
「かあさま、あれはなに？」
「これはなに？」
と質問責め。
色々な物に興味津々で聞いてくるわ。
そういえば、ノイエがお手伝いさんだってことを理解していたみたいだけれど・・・ノイエにでも聞いたのかしら？

ドンドンドンガン！という音が聞こえて、慌てて廊下に出たら、ウィルが階段から落ちて倒れていたの。
慌てて叫びそうになってしまったけど、落ち着いて深呼吸を繰り返したわ。
私が慌てるとロクな事がない。
まずは落ち着けって散々、お母様に言われていたからかしら。

「ウィル坊ちゃま。大丈夫ですか？」

ノイエが駆けつけて声を掛けてくれたの。
冷静になってからウィルの様子を見ると、頭を軽く切ってしまったみたい。

頭なので血が凄いことになっているのだけれど、ウィルが、

「ノイエ、かあさま・・・だーじょぶです。
てぃけつをおねあいてぃます」

ってしっかりとした受け答えをしたので、かなり落ち着けたわ。
ウィルをそっと抱きしめて、

「聖なる魂よ。どうか、私の息子、ウィルの傷をお癒しください」

と、ヒールを唱えたので、傷は治ったの。

「かあさま・・・いまのは・・・まほーですか？」
「ええ、そうよ。癒しの魔法。もう大丈夫かしら？」
「あい。だーじょぶです。それよりも、まほーのことをおしえてくあさい」

もう、目をキラキラさせて、魔法に興味津々。
まだ難しいと思うのだけど・・・熱心に聞いていたわ。
将来は大魔道士でも目指すのかしら。

発声記念日のリリーレルマ（母親）（後書き）

Ｔｗｉｔｔｅｒ　@ｎｅｋｏｍｉｈｏｎｐｏ

誤字修正

訪ねる→尋ねる

会話前後に空行追加

ヒールを試した日

この世界は魔法があることが解った。
大きく分けると3種類。
魔方陣や正確な呪文を唱えることで発動する呪印魔法。
神様（？）へのお伺いを立てることで発動する神聖魔法。
・・・むしろ申請魔法なんじゃないか？
とか余計なツッコミをしたりもするが。
後は、精霊との対話により発動する精霊魔法。

理屈は解っていないようなのだが、魔法を使うには素質が必要らしい。
ＭＰの無い人には使えない・・・みたいなモンのようだ。
そのため、世界中の誰も彼もが魔法を使えるということは無く、一部の選ばれた人間だけが使える・・・と言ったような選民思想もあるらしい。
素質は遺伝しやすいらしく、魔法使いの子供は魔法使いの素質があることの方が多いようだ。

数としては、呪印魔法＞神聖魔法＞精霊魔法となっている。
やはり、精霊と意思の疎通ってのが難易度を高めるらしい。
その代わりと言っては何だが、意思の疎通で発動するため、小難しい手続きとか、お約束事が無いため、柔軟性は抜群。
逆に、呪印魔法は、魔方陣だの、呪文だのがガッチガチに決まっているらしい。
神聖魔法はその中間。
神様にお伺いを立てるとのことなのだが・・・別段、神の声を聞いたとか、そういう宗教的な事は無いらしい。
とは言え、身体を治すってのは、神の奇跡と呼ぶに相応しく、宗教

と結びついているようだ。

魔法の所為で・・・所為と言い切ってしまうのもどうかと思うが・・・科学の発展は遅れている。
物理、化学、自然科学、人体、病理学、ｅｔｃ、ｅｔｃ・・・これらがかなり遅れている。
大抵のことは、魔法で片が付いてしまうからだ。
例えば、建造物には物理、数学などが必要なのだが・・・専門外なのでよくは解らないが・・・強度が足りなければ魔法で補えばいいのだ。
と言うか、魔法で強化するのがアタリマエになっている。
人体に関しても研究は進んでいない。魔法で治せばいいのだ。
人間、楽をするとダメだな。
天文だけは、占星術の絡みで結構進んでいる。
あと、魔法学も当然ながら進んでいる。
進んでいるのかは、よく解らないが、歴史は古いらしい。

ヒールっぽいモノを試してみたい。
もどかしいことこの上ないのだが、そうそう、ヒールを掛ける対象が居ない。
まぁ、そりゃ、そうだ。
けが人が居た所で、３歳の子供にヒールをさせる馬鹿者は居ない。
と、なると、動物にでも・・・とは言え、これまた、素直にヒールを受けてくれるとも思えない。
さて、困った。
と、なると、植物にでも・・・とは言え、これまた、効果が解りにくいのが問題だ。
等々、もやっと問題を考えながらうろついていたら、町を出てしまった。
やべっ。

さっさと戻らないと。
と、思っていたら、目の前に枯れた森が広がっている。
町の隣に、こんな寂しい風景が広がっているとは思わなかった。
「ふむ」
この枯れ木が、死んでしまっていたら、どうにもならないが、もし・・・もし、万が一、生きていたら・・・ヒールが効くんじゃないか？と思いついてしまった。
町に戻るのはヒールを試してからでも遅くはないか？
・・・ってことで試すことにした。
枯れ木に手をかざし、目をつぶる。
「ヒール」
・・・ダメか。
何も起こらないな。
そもそも、神聖魔法らしからぬ唱え方じゃだめか。
「我、彼の者を癒すことを願いたてまつらん。ヒール」
前に母様が使った呪文が思い出せないので適当だ。
こんなのでいいのかどうかは解らないが、身体から何かが抜ける感じがして気だるくなった。
ちなみに、ヒールと唱えただけでは気だるくなったりしない。
それっぽい呪文を加えることで気だるくなる感が追加された。
ってことは、ヒール・・・かどうかは解らないが、何かが発動したんだろう。
見た目、なんら変わりはないが、ちゃんと発動したんだろうか？
まぁ、枯れ木が急にみずみずしくなっても気持ち悪い。
時間が掛かるんだろう。
もう一発くらい撃ち込んでおくか。
「我、彼の者を癒すことを願いたてまつらん。ヒール」
気だるさが一気に増した。
いかん。立ってるのも億劫だ。

なるほど。
これがＭＰ切れ状態か？
座りたくてしょうがない衝動を抑え込みつつ、取り敢えず、町へ戻った。
２発でＭＰ切れとは情けない。
情けないが、枯れ木相手なら誰も困らないし、実験には良いかも。
ばれて大事になっても面倒だし・・・街道から少し奥まった所で実験することにしよう。
今日は、良い収穫であった。
満足である。
はっはっは。

次の日から、２ｍほど奥まった所の木に毛糸を結び、ヒール実験を開始した。
２日後には、枯れ木に花・・・ではなく、芽吹いてきた。
自分のヒールに効果があったことが解り、小躍りしてしまった。

が、一週間後には、再び枯れてしまった。
別の木々も同じ状態になったことから、根本的に何かが間違っているらしい。
とは言え、何が間違っているのか解らないので、日々、ヒールを続けた。

三週間も経とうかという頃、ふと思い至った。
そもそも、枯れた原因は何だったのか？
原因も取り除かずにヒールをした所で、穴の空いたバケツに水を注いでいるだけではないのか？

さて・・・植物の専門家ではないので、植物の病気が解らない。
これでは、単純にヒールのスパルタをしているだけではないか。

まぁ、その甲斐あって、ヒール３発まで撃てるようになったが・・・
それはそれ。

相手の状態を調べる手段があっても良さそうだ。
再度、枯れてしまった木に手をかざし、目をつぶる。
「我、彼の者の不調を知ることを願いたてまつらん。リサーチ」
かなり適当な呪文ではあるが、そういう適当さを寛容に受け止めてくれるのが神聖魔法のいい所・・・というかいい加減な所。
まぁ、機能というか、効能が無かったら発動しないけどね。
目をゆっくり開けると、枯れ木にぼんやりと色が付いている。
色が付いているというか、もやもやがまとわりついている。
ほとんどは、白というか灰色なのだが、地面・・・恐らく根っこがあるであろう部位が赤い。
つまり、根っこに病気があるのかな？
病気の詳細が解らないが、治せるもんだろうか？
ま、治ったらラッキーくらいの意気込みでやってみますか。
「我、彼の者の異常を取り除くことを願いたてまつらん。リコンディション」
赤い部位が青く光り、明滅を繰り返した後、薄い緑になって白に変わった。
治ったってことだろうか？
「我、彼の者を癒すことを願いたてまつらん。ヒール」
・・・さて、こいつはしばらく様子見だな。
ってことはだ・・・今までヒールしてきた木は、全てやり直しか。
やれやれだ。
リサーチは、それほどでも無かったが、
リコンディションは、気だるさが多い気がするな。
今のＭＰでは無理があるってことだろうか？
今のＭＰだと、リサーチ、リコンディション、ヒールでほぼすっからかんだな。

ま、続けていれば、ＭＰも増えるだろうし・・・まだまだ若いんだ。
どうとでもなるだろう。
本日作業分目印の毛糸をくくりつけ、町に戻ることにした。

ヒールを試した日（後書き）

Twitter @nekomihonpo

ヒールを試した日のノイナ（家政婦）

「ウィル坊ちゃま～？ウィル坊ちゃま～？」

お屋敷の中をお探ししたのですが、見当たらず、今は庭を探してさまよっているのですが・・・見当たりません。
ウィル坊ちゃまは、どこに行かれたのでしょう？
万が一・・・ということも考えられます。
早くお探しせねば！

「あらあら、ノイナ。どうしたの？」
「ぁ、リリー奥様。
も、申し訳ありません。
先ほどから、ウィル坊ちゃまのお姿が見当たらないのです」

ちょっと目を離した隙に・・・なんてのは言い訳にしかなりません。
ひたすらに謝り、一刻も早く探し出さねばなりません。

「あら、それなら・・・」
「え？」
「少し前に、
『かあさま、町をみてきます』
って言うので、
『気をつけて行ってらっしゃい』
って見送ったのよ。
ノイナに伝えておくべきだったわね。
ごめんなさい」
「いえ・・・私のことはいいのですが・・・ウィル坊ちゃま、お一人で行かれたのですか？」

「そうねぇ。
お友達と行くとは聞かなかったのだけれど」
い、いくらなんでも放任主義過ぎます。
こ、これは急いでお探しせねばなりません。

「お、奥様。
いくらなんでも危険過ぎます。
ウィル坊ちゃまは、しっかりしたお子ではありますが、まだ3歳です。
誘拐・・・は無いかと信じていますが、大人の力には逆らえません。
どこかでケガをしているかも知れません」
「あらあら。
確かに、そういう心配はあるかも知れないけれど・・・ノイナは心配しすぎじゃないかしら？」
「いいえ、奥様。
心配しすぎということは、決してありません」
「男の子なんですから、少しくらい、やんちゃでもいいと思うのだけれど？」

奥様がやんちゃ過ぎます！・・・とは言えない私。

「私、急いで探しに行って参ります」
「あらあら。そう？悪いわね」
「では、行って参ります」

取る物も取り敢えず、町に出て聞き込みです。

買い物なじみのおやっさんから有力情報を得ました。
なんでもウィル坊ちゃまらしき子供が、町の外の方へ歩いて行ったそうです。

何故、そこでお止めしないのかっ！

と理不尽なことを言いたくもあったのですが、まずは坊ちゃまの安否が大事です。
こちらの外には枯れ森しかなかったはず。
誘拐の危険も少ないはずです。
枯れ森には、危険な野生動物も居なかったはずです。
ある意味、一安心と言った所でしょうか。
町の外へ急ぎましょう。

「あれ？ノイナさんじゃないか。
そんなに急いでどこに行くんだい？」
「あ、ジャックのおやじさん。
ご無沙汰しております。
ウィル坊ちゃまが、こちらの方に来たと聞いて、大急ぎでやってきたのです。
見かけませんでしたか？」
「ウィル坊ちゃんって～と、ランカスターんとこの坊主だな？」
「はい。
まだ3歳の小さな子なのですが、枯れ森の方へ歩いて行ったという話を聞きまして・・・」
「ふ～む・・・じゃぁ、あれが坊ちゃんだったのかな？」
「！？・・・何かご存知なのですね！？」
「ぁ、あぁ・・・なんか小さい坊主が、肩を落としながら町の中心へ向かっているのを見たからな」
「えぇっ！？

い、いつですか！？」
「あぁ、それこそ、今しがただよ」
な、なんということでしょう。
これは急いで戻らなければなりません。

「私は急いで追わねばなりません。
貴重な情報、ありがとうございました。
また、お店の方には、今度寄らせていただきます」
「ぁ・・・あぁ・・・すぐに追いかければ見つかるさ」
「はい！ありがとうございます。
それでは失礼します」

なんということでしょうか。
いえいえ。
貴重な・・・それこそ珠玉な情報を頂きました。
急いで町中に戻りましょう。

「ウィル坊ちゃま～！」

あれからすぐにウィル坊ちゃまを見つけることができました。
ああ、ご無事で何よりです。
お手々を引いて家に帰りました。

それからと言う物、ウィル坊ちゃまが、町へ出かけているようなのです。
ふと、半刻（３５分程度）～１刻（７０分程度）ほど、ウィル坊ちゃまを見かけない日があったのです。
思い返してみると、毎日、半刻程度見かけないのです。

リリー奥様と一緒なのかと思い、確認をしてみたのですが、

「ノイナと一緒だったんじゃないの？」

との仰せ。

こっそりと抜け出しているようなのです。

本当に、本当に偶然、買い物の途中で、ウィル坊ちゃまらしい後ろ姿を見かけたのですが、その日は見失ってしまいました。

ウィル坊ちゃまに限って、悪さをしているとは考えにくいのですが、もし、ここでウィル坊ちゃまが悪の道に走ってしまっては、ランカスター家の家事を預かる身の名折れ！

なんとしても確かめねばなりません！

と、心に誓って、こっそりと監視しているのですが・・・今日もまた、気がつくとおりませんでした。

「ウィル坊ちゃま～？」

ヒールを試した日のノイナ（家政婦）（後書き）

Ｔｗｉｔｔｅｒ　@ｎｅｋｏｍｉｈｏｎｐｏ
まだまだ駆け出しの段階で評価をいただき、ありがとうございます。
その評価に恥じぬよう・・・ご期待に添える展開を書くことが出来ればと思っております。では。

誤字修正
会話前後に空行追加

前世の記憶に苦しんだ日（前書き）

閑話休題です。

前世の記憶に苦しんだ日

４歳にもなれば、色々学んでも不思議は無いだろう。
無いよな。
うん。
ってことで、父様や母様、ノイエを質問攻めにして、知識を蓄えている最中だ。

まずは身近な所から。
父様の職業は公務員。
宮仕えってのが正しいのだが、公務員じゃん。
厳つい顔の割に・・・文官とのこと。
文官にしては立派な体躯だと思うのだが・・・文官だそうで。
何でも、王直属の組織で、直務国税特捜査察官と言うらしい。
えっと・・・マルサって奴ですか？
言葉の響きがデスクワーク似合わない感じなんですけど・・・父様曰く、文官だそうだ。

王直属だけあって、公務員の中では貰いの多い職業らしい。
そんな訳で、我が家にはノイエというお手伝いさんがいる訳だ。

ノイエは、母様と幼なじみとのことで、母様のことをよく解っている感じがする。
母様の天然というか、おっとり具合に振り回されていることも多いが・・・関係は良好だ。
ノイエが成人になるちょっと前に、ご両親を亡くしてしまい、母様の家で厄介になったのが、お手伝いさんになる契機らしい。
私が産まれたのは、アルバ・ヨルド王国というアルバ地方のヨルド

王家が治める国だ。
現在の王は、フィーというお名前だそうで・・・フィヨルドかよ！と突っ込みを入れたくなってしまった。
突っ込みを入れた所で誰にも理解されないのだが・・・悲しい。

比較的、中規模な王国で安穏とした生活を送ることが出来ている。
国家間で戦争とか起こらないのか心配になって、父様に聞いてみたのだが、

「ノラとかクロの脅威があるからね。
国家間で争っている場合では無いんだよ。
時には大侵攻があって、国家間で協力しないといけないからね」
「ノラとかクロですか・・・ノラとかクロって？」
「ああ、そうだな・・・ノラってのは大型の原生動物だな。
大きな牙を持っていたり、素早い動きで飛びかかってきたり・・・大人二人分や三人分はあったりするからね。
さらに大型のノラは、十人分くらいもあったりするんだ。
クロっていうのは・・・そうだな・・・闇の眷属って呼ばれている者達だ」
「闇の眷属・・・ですか」
「そうだね。
町中には居ないけれど、死体が動いたり、人の生き血を飲んだり、呪いを掛けたり・・・という者達だよ」
「そうですか。
そういう脅威があるから、一致団結して、人々を守っているんですね」
「ああ、そうだよ」

ってことで、国家間というか、無意味な戦争がないのはいいことだ。
っていうか・・・ノラク〇かよ！と突っ込みたい。

実に突っ込みたい。
突っ込んだ所で、本当に誰にも理解されない。
なんだ、このもどかしさ。

『くっ！前世の記憶が俺を苦しめる！！』

とか言うと格好いい感じになって、厨二病っぽいけど、内情は実にくだらない。
くそう。

「前世の記憶が俺を苦しめる！！」

・・・想定外です。

前世の記憶に苦しんだ日（後書き）

Ｔｗｉｔｔｅｒ　@ｎｅｋｏｍｉｈｏｎｐｏ

誤字修正

納める→治める

会話前後に空行追加

ケンカをした日（前書き）

ここ数話、いじめ、虐待（を臭わせる）表現が出てきます。苦手な方は飛ばして下さい。

ケンカをした日

日課のヒールをするべく、枯れた森へ向かう。
かれこれ2年も続けていれば、ヒールの回数も増え、生い茂ってきた樹木も１０００本近くになっている。
・・・本数を数えるのが面倒なので数えていないが。

念のために追跡者の目くらましをかねて町中を右往左往。
まぁ、これも日課になってはいるのだが・・・

そろそろ町外れにさしかかろうかという下町のさなか・・・見た目、自分より幼い感じの女の子が泥団子を投げつけられている。
おいおい。ブラザーメンソウル、女の子をいじめるなんてどんな了見だい。

ゴッ！

「あっ」

今のは石か！？

「おい、やめろっ」

主犯格というか・・・ガキ大将が振り返る。
自分より3歳か4歳上かな？
・・・子供はようワカラン。

「なんだ、このガキ？どこのガキだ？」
「さぁ、ここいらじゃ見かけない顔ですね」

「寄ってたかって、女の子をいじめるとは、ずいぶんと格好いいことしてんな！おい」
彼らと女の子の間に立ちはだかる。
「はぁ？イミビトなんだから、いいんだよ」
「邪魔だ。どけよ」
「イミビトだかなんだか知らないが、女の子は守るモンだ。それが男ってモンだ」
「いいから、邪・魔・だっ！」

ゴッ！と鈍い音が頭に響く。
殴ってきたか。
そうか、殴ってきたか。
このクソ野郎！
殴り飛ばされたが、意識があればこっちのモンだ。
自分に対してヒールを念じる。

「こんの・・・卑怯者がっ！」

勢いよく起き上がり、勢いそのままに拳を振り抜く。
ゴツ！
いってぇ。
コブシ痛いよ。
くそう。
ヒールばっかで身体なんか鍛えてねーよ。
くそう。
相手がゆっくり起き上がってくる。
取り巻きの3人が周囲を取り囲む。
1人だけ壁際で傍観しているが・・・

「いってぇな。クソが。

やっつけてやる。
お前らは手を出すなよ」
「ジャン、やっちまえ」
「クソガキ、覚悟しとけよ」

簡単には逃げられそうに無いな。
倒せるとも思えないし・・・ヒールで身体のダメージは抜けるけど、スタミナとＭＰ不足の気だるさは治らないしなぁ。
えっと・・・こういう場合ってのは・・・アゴ狙いで頭を揺らせばいいのか？
こんなナリじゃダメージ出せないだろうし・・・足狙いと思わせつつ、アゴ狙いかな。
等と考えていたら、相手のパンチを避けそこねた。

「くっそ！」

ローキック！
・・・ハズレ。
くそう。
やっぱ持久戦か。

ケンカをした日（後書き）

Twitter　@nekomihonpo

誤字修正

会話前後に空行追加

ケンカをした日のイミビト（いじめられっ子）（前書き）

ここ数話、いじめ、虐待（を臭わせる）表現が出てきます。苦手な方は飛ばして下さい。

ケンカをした日のイミビト（いじめられっ子）

・・・あまり出かけたく・・・なかったの・・・けれど・・・お使いに行かないと先生が怒る・・・から、町に出かけたの。

「忌み人がいるぞ」

「忌み人がこんなトコ歩いてるんじゃねーよ」

ビシャッ

・・・泥団子・・・

ビシャッ

「忌み人は出てけ」

ビシャッ

「うわっ、きたねぇ」

ビシャッ

・・・服・・・汚れちゃった・・・怒られる・・・かな。

ゴッ

痛ッ。

キーンッ。と耳鳴り・・・

「おい、やめろっ」

・・・何？

「なんだ、このガキ？どこのガキだ？」

「さぁ、ここいらじゃ見かけない顔ですね」
「寄ってたかって、女の子をいじめるとは、ずいぶんと格好いいことしてんな！おい」
何？・・・この子・・・誰？・・・何？
「はぁ？忌み人なんだから、いいんだよ」
「邪魔だ。どけよ」
そう。・・・忌み人だもの・・・仕方・・・ないの。
「イミビトだかなんだか知らないが、女の子は守るモンだ。それが男ってモンだ」
「いいから、邪・魔・だっ！」
ドカッ
・・・ボクの目の前で、男の子が・・・殴られる。
「ぁ・・・」
やめて。・・・この子は関係・・・ない。
「こんの・・・卑怯者がっ！」
・・・忌み人なのは・・・ボク。
「いってぇな。クソが。やっつけてやる。お前らは手を出すなよ」
でも・・・声が・・・出ない。
・・・怖い。怖い。怖い。

「ジャン、やっちまえ」
「クソガキ、覚悟しとけよ」

どうしたら・・・いいの？
・・・目の前の男の子の方が・・・小さい。
・・・勝てる訳・・・無い。

「くっそ！」

・・・忌み人のボクなんかのために・・・ボロボロにされちゃう。
・・・どうしたら・・・どうしたら・・・
・・・怖い。怖い。怖い。

『ピリルルル！ピリルルル！』

「やべぇ。イヌだ」
「ジャン！巡視が来るぞ」
「そんなガキほっとけ」

巡視官が・・・来る？
・・・助かった・・・の？
・・・よかった。
・・・ぼろぼろ・・・だけど、大けがは・・・無い？

「ふぅ。・・・とは言え、こっちも逃げた方がいいかな？
ねぇ、行くよ？」

何？・・・手を握られた。

「ぁ・・・」

だめ・・・だよ。

・・・忌み人に触れたら・・・よくないよ？

「面倒はごめんだから行くよ？ほら」

「ぇ・・・」

や。・・・引っ張られる。

・・・ここ・・・町の外・・・

「はぁはぁ」

・・・こんなとこまで・・・来ちゃった。

「はぁはぁ」

「はぁ・・・ごめんね。ちょっと傷見せてね」

「ぇ・・・」

・・・男の子が頭に・・・触る。

「痛ッ」

「あっ、ごめんね。

ちょっと待ってね」

「ぇ・・・いい・・・だ、大丈夫だから」

「ちょっと傷口濡らすよ～」

「ゃ・・・だ、大丈夫だから」

「じゃぁ、ちょっとじっとしててね～」

聞いて・・・くれない。
・・・近くの小川で・・・布を濡らして・・・当ててくれた。
・・・目をつぶって片手をかざしてるけど・・・何をしてる・・・・の？

「我、彼の者を癒すことを願いたてまつらん。ヒール」
「えっ！？」

・・・頭を触ってみる。

「・・・痛くない」
「ん。傷も残ってないし、大丈夫そうだね」
「な・・・何をしたの？」
「ちょっとヒールをね。
・・・それより、汚れちゃったね。ウチに来なよ」

・・・ヒール！？

「ねぇ、ウチに来て身体を綺麗にしよう？」
「ぇ・・・だめ」

びっくりして・・・手を振り払う。

「！・・・ごめん・・・なさい・・・ボク、忌み人だから・・・・」

ボク・・・走って、その場から・・・逃げ出しちゃったの。
男の子が何か言っていたけど・・・よく聞こえなかったの。
何故か・・・涙が出てきて・・・止まらなかったの。

ケンカをした日のイミビト（いじめられっ子）（後書き）

Ｔｗｉｔｔｅｒ　@ｎｅｋｏｍｉｈｏｎｐｏ

修正内容

会話前後に空行追加

私の目の前→ボクの目の前

人さらいの日（前書き）

ここ数話、いじめ、虐待（を臭わせる）表現が出てきます。苦手な方は飛ばして下さい。

人さらいの日

昨日はまんまと（？）逃げられた。
予想外の展開に為すすべ無く逃がしてしまった。
うむ。不覚。
イミビトが何だか解らなかったので、母様に聞いてみた。
「忌み人と言って、迫害・・・そうね、いじめられている人よ。
　彼らは何も悪くないのだけれど、いじめられ続けることで、悪いことをしてしまう人も多いわ」
との事だ。
迫害されている理由までは、教えてくれなかったが、恐らく色々あるのだろう。

さて、今日はだ・・・
昨日のあの子を探すため、下町にやってまいりました！じゃん。
はい。簡単に見つかる訳ありません。
ですよね～。
忌み人さん、どこに居ますか～？等と喧嘩を売って歩く訳にも行きませんし。
地味に困りましたね。

「こんにちは」
「ん？」
後ろから声を掛けられたようなので、振り返ると、昨日のいじめのお仲間が居た。
「無事に逃げられましたか？」

雰囲気から、昨日の続きを今ココで！という感じでは無いのだが、
気安く話しかけられるような友好的な関係でも無かったと思うのだ
が・・・と、思い出した。
１人、離れて見ていた子だな。

「そうですね。
喧嘩も長引かずに済みましたし」
「キミは面白い子ですねぇ」
「・・・ガキ大将のお仲間じゃないんですか？」
「ガキ大将？・・・ああ、ジャンの事ですか。
いや。お仲間ですよ？
まぁ、手下って訳でもありませんがね」

なんとも、ませた感じのする子だな。

「で、そんなお仲間さんが、何用ですか？
昨日の続き・・・という訳でも無さそうですが？」
「ちょっと確認をね・・・キミはヒールが使えるんですか？」
「へぇ。バレてましたか。
そうですね。ヒールです。
どうします？卑怯者とでもなじりますか？」
「いやいや。
喧嘩ってのは自分の力でやるモンだと思いますよ。
そのヒールだってキミの力ですからね。
ただ、子供にしては凄いなと思いましてね」
「・・・変な人ですね」
「いやいや。
ヒールが出来るような凄い子とは友達になっておいた方がいいか
な？と思いましてね」

「いじめの仲間になれ・・・と？」
「あぁ・・・それは・・・う～ん。いじめたくていじめてる訳じゃないんですがね」
「理由はどうでもいいですよ。
僕はあの子の味方です」
「・・・嫌われてますかね？」
「好かれる理由があるとでも？」
「・・・無いですかね。
仲間になると、いじめられませんよ？なんてのも嫌われそうですし」
「ふぅ、そうだね。
好きこのんでいじめられたいとは思わないけど、いじめの仲間にはなりたくないしね」
「取り敢えず、いじめの話はやめましょうよ？」
「ホント・・・変な人ですね。
・・・もう行ってもいいですか？」
「ええ。呼び止めてすいません。
お急ぎですか？」
「ふむ？
・・・つかぬ事を聞きますが、昨日の子がどこにいるか知りませんか？」
「はぁ？キミも不思議な子ですね。忌み人を探しますか」
「ええ。ちょっと探しています」
「ミレイは、この先のハズレの孤児院に居ますよ」
「ミレイっていうのか・・・」
「名前、聞かなかったんですか？」
「・・・逃げられたんですよ」
「ぷ・・・ふはははっはは」
笑われた。思いっきり笑われた。

くそう。
そんなに楽しいか。
くそう。
自分でも間抜けだとは思ってたさ。
再認識させないでくれ。

「・・・わ、笑うなよ」
「いやいや。すみません。ぷは。
いやいや。名前も知らないのに探してるんですか」
「ああ・・・ちょっとね」
「ついて行っても？」
「はぁ？・・・・う～ん？」
「邪魔はしませんよ？」
「誤解されて逃げられても困るからやめとく」
「・・・そうですか。そうですね。
残念ですが、邪魔はしないと言いましたし」
「こっそり付いてくるのも無しだぞ」
「ええ、解ってますよ。
そうそう。お名前を聞いても？」
「普通、自分から名乗るモンですよ？
まぁ、お約束だからいいけどさ。
ウィル。ウィル・ランカスター。５歳だ」
「５歳！？すごいですね。
アルフ・ニナカ。７歳です」
「アルフ・・・でいいかな？変な奴だな」
「ウィルほどでは、ありませんよ」
「まぁ、いいや。助かったよ」
「礼にはおよびませんよ」

妙にませたというか、クールを決め込んでるのか、本当にクールな

のか・・・いまいち判断が付かないが、思ったより面白い奴だ。

まぁ、それはそれ。
教えられた方へ行ってみると、予想に反して、立派な建物が見えた。
これが本当に孤児院なのか？
表札は出ていないようだが・・・孤児院が儲かる事業とはこれっぽっちも思えない。
なんでこんなに立派な建物なのか？
ぐるっと建物を一回り。
表の立派な建物に隠れるかのように、裏にひっそりとボロ屋敷が見えた。
こっちが孤児院なんだな。
と言うのは解る。
じゃぁ、表のは何だ？
別の建物・・・にしては同じ敷地に建っている。
同じ敷地とは言っても・・・
ぼろ屋敷は倉です。と言われても不思議はないくらい
端っこに追いやられているし・・・
それにしてもボロだ。
・・・とにかく酷い。

そのボロ屋敷の裏（？）に昨日の子・・・ミレイと言ったか・・・が居た。
昨日は泥で汚れてしまったが、
今日は黒髪がうっすらと蒼く光って綺麗な子だ。
ボロボロの塀をくぐり抜けて、まずは挨拶だ。

「こんにちは」
「！？・・・こ、こんにちは」
「少し、お話してもいいかな？」

「・・・だめ」

・・・とりつく島もないってのは厳しいです。
母様・・・めげそうです。

「それは・・・忌み人だから？」
「・・・そう。・・・ボク、忌み人だもの」
「う～ん。僕は気にしないよ？」
「・・・気にした方が、いい」

え？
いやいや。
気にしないって言ったのに・・・気にした方がいいとは・・・面白い返しだ。

「まぁ、いいや。
僕の名前はウィル。ウィル・ランカスター。
君の名前は？」
「え？・・・えっと・・・ミ、ミレイ」
「そっか。ミレイ・・・よろしくね」

と右手を差し出す。

「えっと・・・」

おずおずと右手を差し出してきたので、こちらからシェイクハンズ。

「うんうん。
じゃぁ、ミレイとは友達ってことでいいよね？」
「え？・・・な、何？」

「何か急ぎの用事ある？」
「えっと・・・何もない・・・けど？」
「じゃぁ、行こう」

かなり強引だけれども、握手したついでにそのまま引っ張って移動を開始した。

「ゃ・・・ま、まって」

いきなり家に連れて行ってもいいんだけど、それもハードルが高そうなので、取り敢えず、枯れ森の奥に連れて行こう。
あそこなら、人も来ないし、最近では果実もあるし、おもてなしも出来そうだ。

どうも、あまり人目に付きたくないようなので、裏道、人気のない道、町の外縁を選んで移動する。
言葉では軽く戸惑いと否定を口にするが、身体を突っ張ってまでの反発はない。
ってことで、嫌がる言葉は全て無視した。
うん。我ながら外道っぽい。
これでは悪役では無いか。
よいではないか。
よいではないか。
・・・うん。
ま、いっか。

「わぁ・・・」

枯れ森の奥に到着。

「ここ・・・枯れ森？
・・・入り口は枯れ森・・・だったのに」
「そうだよ。枯れ森だよ」
「ぁぅ・・・ボ、ボクを連れ出して・・・どうするの？」
「ああ、まぁ、友達になりたいから・・・かなぁ？」
「・・・忌み人なのに？」
「忌み人ってのが解らないからね」
「・・・変なの」
「そうかな？
まぁ、いいや」
「・・・いいんだ」
「果物食べる？」
「・・・果物！？・・・えっと・・・」
「遠慮しなくていいよ。森の果物だし」
「・・・大丈夫？」
「大丈夫じゃないかも」
「ぇ！？」
「忌み人と友達になりたいって病気になっちゃう」
「ぇ！？
・・・えっと・・・大丈夫？」
「・・・そんな目で見ないで」

失敗するといたたまれない。
実にいたたまれない。
いたたまれなさすぎるので、赤い果実をもぎ取る。

アダムの果実というらしいが・・・リンゴに似ている。
どう食ってもリンゴに似ている。
アダムとイブの禁断の果実かよ！
突っ込みを入れたくなったが、神話とか関係無いらしい。

アダム家で流通を取り扱ってるからららしい。
なんだ、その理由。
スイカをアダムさん家で扱ったら、それもアダムの果実か？
と思うのだが、どうも果物の流通の祖らしい。
らしい・・・ってのは、アダム家が既に没落しててうんぬんかんぬん。
要するに解らないらしい。
いい加減すぎる。
それはそれ。
ほんと、リンゴまんまなので、そのまま食べられる。
枯れ森でのおやつにはありがたい。

「ほら」
「・・・いいの？」
「うん。僕のじゃないしね」
「・・・えっと・・・頂きます」

ミレイが小さくお辞儀をして、両手で小動物みたいに食べる。
うん。かわいらしい仕草だ。
身だしなみも整えれば、かなりかわいいんじゃないか？

「・・・おいしい・・・」

ぽわっとした笑顔だ。
前髪が気になるな。
ちょっと手で軽く前髪を上げてみる。

「ゃ！？・・・な、何？」
「ぁ、ごめんね。
僕のことは気にせず、食べてていいよ。

それとも、もっと持ってくる？」

ふるふると否定。

「あまり・・・幸せになると・・・後がつらい」

何を言っているんだ。
ショックだった。
リンゴ１個で・・・しかも森の果実だ。
タダで手に入れた果実１個で・・・幸せと言えてしまう境遇。
ものすごくショックだった。
他にも色々ショックな事があるんだが、どうしても気になったので、
彼女の手を取った。

「手、見せてね」
「ぇ・・・ゃ！」

否定はするけど、強烈な否定はない。
彼女の手を取って見る。
不自然なやけどの跡が多い。

「我、彼の者の不調を知ることを願いたてまつらん。リサーチ」

だめか。
特に不自然な点は見受けられない。
やけど跡だからか・・・治ってるしなぁ。
治ってるモンはダメだろうなぁ。

「我、彼の者を癒すことを願いたてまつらん。ヒール」

ダメかぁ。

「ぁぅ・・・あ、あの・・・」

「ごめんね。

僕のヒールじゃ、やけどの跡は消えそうにないや。

まだまだ子供だから、そのうち目立たなくなるとは思うけど・・・

このやけどは・・・どうしたの？」

「・・・灰皿なの」

「は？灰皿？」

「・・・うん。・・・忌み人だから」

どういうことか理解したのと同時に、自分でも頭が沸騰するのが解った。

孤児院の大人が、ミレイを忌み人だからと虐待している！

あまりの薄汚さにめまいがした。

このままじゃダメだ。

ミレイが本当にダメになってしまう。

「ミレイ・・・ウチに行こう」

強い調子で言った。

「・・・や！」

更に強い調子で、手を振りほどかれた。

「え？・・・ど、どうして？」

「・・・親との仲・・・悪くなっちゃう」

言うが早いか、彼女は駆けだしてしまった。

「え？」

すぐに追いかければ、追いつけたのだろうが、
何というか・・・あっけにとられて、追いかけるどころではなかった。
親との仲が悪くなる？
どういうことだ？
えっと・・・
普通の親ならば、忌み人を嫌う？
忌み人を連れてきた子との関係がまずくなる？
ってことだろうか？
説明を求めようにも、逃げられてしまったし・・・
また明日にするか。
まずは・・・一応、母様に断りを入れておくか・・・

人さらいの日（後書き）

Ｔｗｉｔｔｅｒ　@ｎｅｋｏｍｉｈｏｎｐｏ

感想、評価ありがとうございます。
ミレイの「・・・」が多いのは意図的です。
自分でもちょっとウザいかな？と思いますが、表現と思ってお目こぼしいただければ幸いです。

人さらいの日のアルフ（いじめっ子）（前書き）

ここ数話、いじめ、虐待（を臭わせる）表現が出てきます。苦手な方は飛ばして下さい。

人さらいの日のアルフ（いじめっ子）

学院が休みなので暇ですね。
ジャンは家の手伝いで忙しいでしょうから、本当に暇です。
ぼ～っと町ゆく人を眺めていると、さっきからちょろちょろと行ったり来たり・・・昨日のちょっと生意気な子ですね。
喧嘩の最中に、自分にヒールをしているように見えたのですが・・・
あんな小さい子が、ヒールを使えるモノなんでしょうか？
そもそも、無詠唱のヒールなんて可能なんでしょうか？
しかも、結構な回数を自分にヒールしているように見えましたが・・・
・そんなにヒールを使えるモノでしょうか？
特殊体質で超回復を持っている可能性も否定できませんね。
疑問だらけです。
ロロに聞いてみたいところですが、休み明けまで無理ですね。
・・・本人に聞いてみますか。

「こんにちは」
「ん？」
「無事に逃げられましたか？」

警戒されていますかね。
なんとも仕方ないですが。

「そうですね。
喧嘩も長引かずに済みましたし」

・・・おや？応対をしてくれるようです。

「キミは面白い子ですねぇ」

「・・・ガキ大将のお仲間じゃないんですか？」
「ガキ大将？・・・ああ、ジャンの事ですか。
いや。お仲間ですよ？
まぁ、手下って訳でもありませんがね」

ガキ大将ですか。
そうですね、ガキ大将ですね。

「で、そんなお仲間さんが、何用ですか？
昨日の続き・・・という訳でも無さそうですが？」
「ちょっと確認をね・・・キミはヒールが使えるんですか？」
「へぇ。バレてましたか。
そうですね。ヒールです。
どうします？卑怯者とでもなじりますか？」
「いやいや。
喧嘩ってのは自分の力でやるモンだと思いますよ。
そのヒールだってキミの力ですからね。
ただ、子供にしては凄いなと思いましてね」

本当にヒールでしたか。
結構な回数、使っていたように見えたのですが・・・あまり疲れていたようには見えませんですし・・・

「・・・変な人ですね」
「いやいや。
ヒールが出来るような凄い子とは友達になっておいた方がいいかな？
と思いましてね」
「いじめの仲間になれ・・・と？」

う・・・厳しいところを突いてきますね。

「あぁ・・・それは・・・う～ん。
いじめたくていじめてる訳じゃないんですがね」
「理由はどうでもいいですよ。
僕はあの子の味方です」
「・・・嫌われてますかね？」
「好かれる理由があるとでも？」

ごもっともですね。

「・・・無いですかね。
仲間になると、いじめられませんよ？なんてのも嫌われそうですし」
「ふぅ、そうだね。
好きこのんでいじめられたいとは思わないけど、いじめの仲間にはなりたくないしね」

実に、耳に痛い話ですね。

「取り敢えず、いじめの話はやめましょうよ？」
「ホント・・・変な人ですね。
・・・もう行ってもいいですか？」
「ええ。呼び止めてすいません。
お急ぎですか？」
「ふむ？
・・・つかぬ事を聞きますが、昨日の子がどこにいるか知りませんか？」
「はぁ？キミも不思議な子ですね。
忌み人を探しますか」

「ええ。ちょっと探しています」
「ミレイは、この先のハズレの孤児院に居ますよ」
「ミレイっていうのか・・・」
「名前、聞かなかったんですか？」
「・・・逃げられたんですよ」
「ぷ・・・ふはははっはは」
「・・・わ、笑うなよ」
「いやいや。すみません。ぷは。
いやいや。名前も知らないのに探してるんですか」
「ああ・・・ちょっとね」

是非とも見てみたいですね。
興味が湧いてきました。

「ついて行っても？」
「はぁ？・・・う～ん？」
「邪魔はしませんよ？」
「誤解されて逃げられても困るからやめとく」

ああ、そうですね。
いじめの仲間・・・と思われても、彼には迷惑でしょうし。

「・・・そうですか。そうですね。
残念ですが、邪魔はしないと言いましたし」
「こっそり付いてくるのも無しだぞ」
「ええ、解ってますよ。
そうそう。お名前を聞いても？」
「普通、自分から名乗るモンですよ？
まぁ、お約束だからいいけどさ。
ウィル。ウィル・ランカスター。５歳だ」

「5歳!?すごいですね。
アルフ・ニナカ。7歳です」
「アルフ・・・でいいかな?変な奴だな」
「ウィルほどでは、ありませんよ」
「まぁ、いいや。助かったよ」
「礼にはおよびませんよ」

ほんと、面白い人です。
ウィル・ランカスターですか。
ロロに紹介したいところですが・・・中々難しいでしょうね。
いじめっ子の仲間・・・のままですかね?
彼がウチの学院に来てくれると楽しそうです。

人さらいの日のアルフ（いじめっ子）（後書き）

Ｔｗｉｔｔｅｒ　@ｎｅｋｏｍｉｈｏｎｐｏ

ストックが無くなるので、あまり連続で上げたくないのですが、反応があると、ついつい公開したくなる病。

誤字修正

タイトルの「の」抜け

来客の日（前書き）

ここ数話、いじめ、虐待（を臭わせる）表現が出てきます。苦手な方は飛ばして下さい。

来客の日

昨日、母様に断りを入れた後、速攻でミレイを探しに出たのだが、見つからなかった。
さすがに孤児院に乗り込んでまで・・・という勇気はなかった。
家に帰ってから、父様と母様にミレイの話をした。
２人とも、最初は忌み人ってことで嫌悪感を示したが、最後は連れてきて良いと言ってくれた。
虐待の可能性が決め手になったようだ。
ミレイが、自分と両親との仲を気にした。
というのも効いている。
まぁ、コレに関しては、彼女が実に心優しい人であることを示しているし、忌み人ということに関しても誤解があるのかも知れない。
特に父様が虐待に関して怒り心頭の様子。
厳つい顔で怒られると、ちょっと怖い。
涙出そうになった。
まぁ、そんな訳で、両親の了解は得られたので、まずはミレイをウチにかっさらう次第。
ってことで、朝から孤児院を張っている訳です。
・・・不審者ですかね。
いいや。
子供なんだから大丈夫。
・・・大丈夫。
・・・めげそうです。

お、あれは・・・えっと・・・アルフだったか。

「アルフ！」
「おゃ？こんにちは。

ウィルから声を掛けてくるとは思っていませんでしたよ」
「うん。そうだね。
それはそれ。
ミレイを見なかった？」
「今日・・・ということですよね？」
「うん」
「今日は見てないですね」
「そうか。ありがとう」
「・・・なんですか、その・・・もう行っていいよみたいな扱いは」
「いや、行っていいよ？」
「ふぅ。相変わらず変な人ですね。
それで、今日はどうしたんですか？」
「ミレイ待ち」
「はぁ・・・ミレイ待ちですか」
「そそ。張り込み中だから行っていいよ」
「じゃぁ、張り込みしながらでいいので、話しませんか」

思わず、なんとも言えない顔でアルフを見てしまった。

「ほんと、変な人ですね」
「いえいえ。こんな所で張り込みをしている5歳児ほどではありませんよ」

・・・更に何とも言えない気持ちにさせられた。

「新しい遊び・・・ってことはなさそうですが？」
「そうだね。・・・アルフに協力してもらうか」
「は？」
「うん。悪くない。アルフに協力してもらいましょう。
是非とも協力してください」

「えっと・・・何をですか？」
「ミレイをちょっとかっさらおうと思っていまして」
「は？」
「ちょっとウチまで強制連行しようと思っていまして」
「はぁ」
「ちょっと呼び出してきてくれませんか」
「いやいやいや。オカシイですよね。色々と。
そりゃぁ、もう・・・色々と」
「いいじゃないですか。
アルフ！ウィル！で呼び合う仲じゃないですか」
「いやいや。呼び合うだけの仲ですよね」
「まぁまぁ、細かいことはいいじゃないですか。
ここで貸しを作っておけば・・・程度に考えてくださいよ」
「そんな気軽な貸しじゃないですよね？」
「ちょっと、うまいこと言って、ウチまで連れてきてくださいよ。
あとはこっちでうまくやりますから」
「ウチまでって・・・結構距離ありますよね？
あとはって・・・ほとんど終わってますよね？」
「年上なのに小さいことを気にする人ですね」
「はぁ・・・まぁ、ウィルの家まで連れて行くくらいならいいですけどね」
「え？ほんとに！？」
「・・・なんですか。その反応は」
「いえいえ。大助かりです」
「既に嫌われているので、ちょっとくらい強引にしても上乗せされるだけなので、気にしませんが・・・」
「ちゃんとフォローしておきますよ」
「別にいいですよ」

まさか、ほんとうにやってくれるとは思わなかった。

ちょっとくらい強引ってのが引っかかるが、気にしてたら話が進みそうにないしな。

「ウチまでと言いましたが、さすがにそれもどうかと思いますので、そこの角まででいいですよ」
「そうですね。その方が助かります」
「とは言え、逃がしたくないので家まで付き合って頂けると助かります」
「まぁ、いいですけど・・・」
「じゃぁ、角で隠れてますので・・・僕の名前を出すと警戒されるかも知れませんので、うまく誤魔化してくださいよ」
「警戒って・・・何をしたんですか？」
「まぁまぁ・・・じゃ、お願いしますよ」
「・・・はいはい」

アルフが素直に孤児院の方へ・・・本当に行ってくれるとは・・・言ってみるモンだ。
うん。彼の中の人はいい人だな。

しばらく時間を潰していると、アルフがミレイを連れて戻ってきた。
さすがにうつむいてる。
いや。
昨日も、その前も、ミレイはうつむき加減だった気がする。
忌み人という枷が、前を向いて歩くということにも影響しているんだろうなぁ。

「こんにちは。ミレイ」
「・・・ぇ！？」
「これでお役ご免ですかね」
「いやいや、もうちょっと付き合って貰う約束でしたよね」

「はぁぁ・・・もう、結構疲れたんですが」
「貸しでいいですから、お願いしますよ」
「・・・あの・・・どういうこと？」
「ああ、僕がお願いしてミレイを連れてきて貰ったんです」
「・・・なぜ？」
「ちょっと連れて行きたいところがありまして。
おいやですか？」
「・・・ぅ・・・えっと・・・」

アルフを警戒してるね。
まぁ、それはしょうがないよね。

「大丈夫です。彼には何もさせません。
もし、彼がミレイをいじめるようなら、僕が全力で守ります。
だから安心してください」
「・・・ぅ、うん」
「じゃぁ、行きましょう」

うなずくやいなや、ミレイの手を取って歩き出した。

「アルフは、約束ど～り、付いてきてくださいね」
「約束ですからね」
「じゃぁ、ミレイ・・・ちょっと歩きますよ」
「・・・どこ、行くの？」
「本当は目隠ししたいくらい内緒です」

強引に手を引いて連れてきた。
うん。
実にワルモノです。
口では嫌と言いながら、あまり強い反応がないので、ついつい本当

に連れてきてしまった。

「ウィルは、やっぱりいいとこのお坊ちゃんだったんですねぇ」

アルフがしみじみと言う。

「いいとこと言うほどですかね？」
「十分、いいとこだと思いますよ」
「なるほど」
「世間知らずのお坊ちゃまですね」
「・・・なんか含みがありますね。
まぁ、いいです。アルフ、ありがとうございました」
「本当にこれでお役ご免なんですね」
「ウチにあがって、お茶でも飲んで行かれますか？」
「やめておきましょう」
「そうですか・・・さぁ、ミレイ、到着です。家に入りますよ」
「ぇ？」
「じゃぁ、ウィル・・・私はこれで失礼しますよ」
「ええ、本当にありがとうございました」
「今日のことは貸しにしておきますからね」
「お安くしておいてください」
「たっぷりと取り立てますよ」
「お手柔らかに」
「ははは、じゃ、また今度」
「ええ。また今度」
「ぁぅ・・・じ、じゃぁ・・・また今度」
「ミレイはまだダメですよ」
「ぁぅ・・・」
「さぁ、家にはいりましょう」

前庭を抜けて玄関へ。
そして玄関ホール。

「ただいま。母様、ミレイを連れてきました」
「あらあら。いらっしゃい」

ミレイはおっかなびっくりで、僕の背中に隠れる。
なんとも・・・小動物ちっくで和む。

「まあまあ、可愛らしい。・・・美人さんね」

ふむ。
そうだよな。
将来は美人になりそうだ。
黒髪も綺麗だし。

「じゃぁ、まずはお風呂に入りましょう」
「は？母様、お風呂ですか？」
「ええ、そうよ。
可愛い子ですからね。
綺麗に磨き上げないと。
そうそう。ウィルはダメよ」
「も、もちろんですよ。何を言ってるんですか」
「ぁぅ・・・」

ミレイが拉致されていった。
ドナドナが聞こえてきそうだな。
ぽつ～んと1人残されてしまった。
えっと・・・・・・リビングで待つかな。

来客の日（後書き）

Ｔｗｉｔｔｅｒ　@ｎｅｋｏｍｉｈｏｎｐｏ

修正内容

引っかかりるが→引っかかるが

私の名前→僕の名前

来客の日のリリーレルマ（母親）（前書き）

虐待（を臭わせる）表現が出てきます。苦手な方は飛ばして下さい。

来客の日のリリーレルマ（母親）

「じゃぁ、ミレイちゃん・・・一緒にお風呂に入りましょう」
「え・・・」
「さあさあ」
「ぁぅ・・・」

ちょっと強引だけれど、ミレイちゃんをお風呂に連れて行ったの。
忌み人として虐げられてきた期間が長かったからか、すっかり引っ込み思案というか、人との接触を極端に嫌っているみたい。
そんな性分に育ってしまっていることが悲しかったわ。
脱衣所で服を脱がすと、服の下からアザだらけの身体が現れたわ。

「これは・・・」
「あの・・・えっと・・・」

思わずミレイちゃんを抱きしめてしまったの。
こんな子に・・・酷い虐待をするなんて。
なんて酷い・・・こんな素直な子を守ってあげたい・・・誰がこんなことを・・・と言った諸々のことがぐちゃぐちゃっとして・・・

「ぁぅ・・・ごめんなさい」
「え？どうして謝るの？」
「だって・・・こんな・・・だし。忌み人・・・だから」
「ううん。謝らなくていいの。
むしろ、私たちが謝らなければいけないわ。ごめんなさいね。
つらかったでしょう？」
「ぇぅ？・・・ううん」
「冷えてしまうわ。お風呂に入りましょう」

「・・・どうしても？」
「そうね。折角だから、どうしても」

「うわ・・・あったかい・・・・」
「そう。よかった」

二人してお風呂に浸かる。
残念ながら、身体のアザや火傷の跡はヒールでは治せなかったの。
まぁ、そんな気はしていたのだけれど・・・あまりにも酷いので治してあげたかったわ。
若いから、そのうち目立たなくなるとは思うのだけれど。

「ねぇ。ミレイちゃん」
「・・・はい」
「ウチの子にならない？」
「ぇ！？・・・・だめ」
「あら。だめなの？どうして？」
「だって・・・・嫌われちゃう」
「嫌われちゃう？誰から？」
「みんなが・・・・みんなから」
「大丈夫よ。誰もミレイちゃんを嫌ったりしないわ」
「ううん・・・・外のみんなから」
「大丈夫よ。ウチの人が守ってくれるから」
「ううん・・・・嫌われるの・・・・だめ」
「そう。優しいのね」

本当、優しい子。
忌み人を家族として引き取ってしまったら、家族が世間から爪弾きになるって子とを理解している。

なんて優しい子。
ぎゅっと抱きしめてしまったの。

「・・・ちょっと・・・苦しい」
「あらあら。ごめんなさい。
ウチの子になるのがダメなら、ウチで働くのはどう？
これならミレイちゃんもそんなに困らないんじゃない？」
「ぇ？・・・えっと・・・」
「そうね。ウチの子になってしまうと、ウィルとの結婚で困りそうだし・・・身元の引き受けだけなら、家族ではないのだから、結婚で世間体を気にする必要も無いわね」
「ぇ？・・・ぇ？・・・あの・・・だめ」
「あら？ウチのウィルは嫌い？」
「・・・そんな・・・こと、ない・・・と思う」
「あらあら。じゃぁ、問題は解決ね」
「ぇ？・・・解決・・・してない」
「ウチで住み込みのメイドさんなんてどう？
きちんとお給金も出すし、家族には追々なればいいわ。
これならミレイちゃんも問題無いわよね」
「ぁぅ・・・困る・・・」
「あらあら。嫌なことは早めに解決しておかないとね。
何か嫌なことあるかしら？」
「えっと・・・忌み人だから・・・」
「ん～・・・ミレイちゃんは忌み人じゃないわ。
これで問題は解決ね」
「ぇ？」
「だって、ミレイちゃんはこんなにも良い子なんですもの。
忌み人なんかじゃないわ。
仕事のことは、ノイナからお聞きなさいな。
急がずに、ゆっくり憶えていけばいいから」

「あぅ・・・」

ちょっと強引すぎたかしら？
でもこれくらいしないと、この子は身を引いてしまいそうだし・・・
そういう部分は時間を掛けて解決していけばいいかしらね。
ゆくゆくはウィルのお嫁さんとして、家族になっていけばいいのだし。

「これから、よろしくね。ミレイちゃん」
「えぅ・・・」

来客の日のリリーレルマ（母親）（後書き）

Twitter @nekomihonpo

来客の日のミレイ（お客さん）

・・・ボクに泥を投げてた人・・・の仲間？の人が・・・ボクに用がある・・・って・・・怖い・・・から、付いていったら・・・昨日の子がいたの。
・・・どういうこと？・・・って思っていた・・・ら・・・連れられて・・・その子の家に着いたの。
帰ろうと・・・したら、ダメだって・・・忌み人なんか、家に・・・入れちゃ、ダメ・・・だよ？
おっきな・・・お家に入ったら・・・綺麗な人・・・

「あらあら。いらっしゃい」

！？・・・ボクに、話しかけてきた・・・の？

「まあまあ、可愛らしい。・・・美人さんね。
じゃぁ、まずはお風呂に入りましょう」

か、かわいい！？・・・美人！？・・・お風呂！？
お風呂・・・ボク？
忌み人なの・・・に！？
え？え？・・・どうして？
・・・ウィルの・・・お母さん・・・に、押されるように・・・連れて行かれたの。
・・・おかしい。
・・・おかしいよね。
・・・ボク・・・忌み人だよ？

おっきな・・・お風呂で・・・すごく・・・暖かくて・・・ウィル

の・・・お母さんと二人・・・暖かかったの。

「ねぇ。ミレイちゃん」
「・・・はい」
「ウチの子にならない？」
「ぇ！？・・・だめ」

・・・突然のことで・・・だめ・・・って言っちゃったの。
だって・・・忌み人・・・だもの。

「あら。だめなの？どうして？」
「だって・・・嫌われちゃう」
「嫌われちゃう？誰から？」
「みんなが・・・みんなから」
「大丈夫よ。誰もミレイちゃんを嫌ったりしないわ」
「ううん・・・外のみんなから」
「大丈夫よ。ウチの人が守ってくれるから」
「ううん・・・嫌われるの・・・だめ」
「そう。優しいのね」

ぎゅ・・・って、抱きしめられたの。
・・・すごく暖かくて・・・優しくて・・・

「・・・ちょっと・・・苦しい」
「あらあら。ごめんなさい」
「ウチの子になるのがダメなら、ウチで働くのはどう？
これならミレイちゃんもそんなに困らないんじゃない？」
「ぇ？・・・えっと・・・」

・・・ど、どうして？

・・・なんで？
・・・解らない。

「そうね。ウチの子になってしまうと、ウィルとの結婚で困りそうだし・・・身元の引き受けだけなら、家族ではないのだから、結婚で世間体を気にする必要も無いわね」

け、結婚・・・！？
結婚・・・って・・・ボク・・・無理！

「え？・・・ぇ？・・・あの・・・だめ」
「あら？ウチのウィルは嫌い？」

・・・え？え？
・・・えっと・・・よく解らない。
・・・けど・・・ウィルは・・・やさしい。

「・・・そんな・・・こと、ない・・・と思う」
「あらあら。じゃぁ、問題は解決ね」
「え？・・・解決・・・してない」
「ウチで住み込みのメイドさんなんてどう？
きちんとお給金も出すし、
家族には追々なればいいわ。
これならミレイちゃんも問題無いわよね」

・・・忌み人だから・・・よく・・・ない。

「ぁぅ・・・困る・・・」
「あらあら。嫌なことは早めに解決しておかないとね。
何か嫌なことあるかしら？」

「えっと・・・忌み人だから・・・」
「ん～・・・ミレイちゃんは忌み人じゃないわ。
これで問題は解決ね」
「え？」
「だって、ミレイちゃんはこんなにも良い子なんですもの。
忌み人なんかじゃないわ。
仕事のことは、ノイナからお聞きなさいな。
急がずに、ゆっくり憶えていけばいいから」
や・・・話、通じてない・・・
「あぅ・・・」
「これから、よろしくね。
ミレイちゃん」
「えぅ・・・」

お風呂・・・上がったら、真っ白なもこもこで・・・身体を拭かれたの。
すっごい・・・柔らかくて・・・もこもこ。
ウィルの・・・お母さんが、拭いてくれた・・・の。
そしたら、別の・・・女の人が・・・服を着せて・・・くれたの。
・・・すべすべ・・・で、綺麗で・・・ボクの服じゃなくて・・・
でも、ボクにぴったり。
「・・・あの・・・これ・・・」
「はい。リリー奥様から、メイド服を用意するように。とのことでしたので、急ごしらえで申し訳ないのですが、ミレイさんに合うよう、仕立てました。
サイズに問題はありませんか？」

「・・・そ、そうじゃなく・・・・て・・・・ボクの服・・・・は？」
「ああ・・・元の服ですか。
今、洗濯をしている最中ですので、これで我慢ください」
「・・・・でも・・・・ボク・・・・忌み人」
「いいえ。今日からはランカスター家の使用人の一人だと伺っております」
「・・・・ぁぅ」

・・・この人も・・・・忌み人って・・・・解ってくれない。

「ほら、ノイエ。ミレイちゃんが脅えちゃってるわ。
いきなり口調が厳しいわよ。
もっと優しく接しなさいな」
「そうですね。ちょっときつかったかも知れません。
しかしながら、曲がりなりにも、ランカスター家の使用人となるのですから、お客様対応という訳にもまいりません」
「そうね。まぁ、そんな厳しいことは追々でいいから、新しい家族が増えたと思って接してあげなさいな」
「そうですね」
「・・・・忌み人だから・・・・だめなの」
「いいえ。違いますよ。
新しい家族です」
「そうね～。所で、お着替えは終わったかしら？」
「はい。奥様」
「どれどれ～。まぁ、ほんと可愛らしい」

・・・・ぎゅって・・・・抱きつかれたの。

「・・・・ぁぅ」

来客の日のミレイ（お客さん）（後書き）

Ｔｗｉｔｔｅｒ　@ｎｅｋｏｍｉｈｏｎｐｏ

ストックほとんど無いのに、反応があるとついつい嬉しくなって放出していまう病。

家に来た日のその後

ガチャ。
どうやら、やっとお風呂が終わったようだ。
思った以上に長かったなぁ。
と、リビングの扉の方へ顔を向けると・・・えっと・・・ミレイが母様の後ろに隠れてる。
ずいぶん仲良しになったなぁ。

「ずいぶんと打ち解けたというか・・・なつかれてますね。母様」
「んふふ～。さぁ、ミレイちゃん。
お披露目ですよ～」
「・・・ぁぅ」

メイドさんがいた。
ちっちゃいメイドさんがいた。
何がどうとかよく解らないが、照れまくってるので、実にかわいらしいメイドさんがいた。

「えっと・・・母様？」
「んふふ～。かわいいでしょ～」
「ええ・・・それはかわいらしいのですが・・・何故にメイドさんなんですか？」
「・・・ごめんなさい」
「いえいえ。謝らないでください。
本当にかわいらしいですから」
「ぁぅ・・・」
「ミレイちゃんがね、家族になるのは嫌だっていうのよ」
「ふむ・・・そうですか」

「でね。じゃぁ、かわいらしいメイドさんにしましょう。って事にしたの」
「・・・えっと・・・そうですか」
「そうなのよ。かわいいでしょ？」
「・・・それは否定しませんが」
「そんな訳で、ウィル専属のメイドさんにしようかと思うのだけれど？」
「「え？」」
「あら？かわいらしいメイドさんは嫌い？」
「いえいえいえ。そういう問題じゃないですよね？
ウチで引き取るって話だったじゃないですか。
なんでメイドさんなんですか」
「ランカスター家が後見人・・・後ろ盾になってミレイちゃんが１人でがんばれるように応援します」

母様・・・やる気があふれてるのはいいのですが、ガッツポーズはどうかと思います。

「ミレイがそれでいいんなら・・・ミレイはそれでいい？」
「・・・なんで・・・」
「ん？」
「なんで・・・してくれるの？」
「たまたまです。
たまたま・・・たまたま、ミレイが酷い状況にあるということに気がついてしまった。
偶然目にしたミレイの状況が、あまりにも酷く・・・手を差し伸べることで、自己満足・・・良心の呵責から逃れるため・・・結局、ミレイしか救われていないのに。
所詮、偽善で自己満足で・・・それでも、ミレイ１人でも・・・救うことが出来るのならいいかなって。

ミレイは・・・救われたと感じてくれるかな？
これは押しつけになってしまうのかな？」
「ぁぅ・・・ボク・・・忌み人で・・・きっと・・・みんなに迷惑・・・」
「そんな」「そんなことはないわ。ミレイちゃんは、こんなにもいい子なんだもの」

母様がミレイを抱きしめる。
母様・・・私の台詞の最中です。
いい所を持って行かれてしまった。
まぁ、いいんですがね・・・。

「ぁぅ・・・ぅぇ・・・ぅぇぇぇぇ」

泣き出しちゃったよ。
どうするんですか母様。

泣き止むまで掛ける言葉も見つからず。
うわべだけの言葉ならどうとでもなりそうだったが、ここは泣きたいだけ泣いた方がいいのかな？と・・・

「そういえば、身元の引き受けに関する手続きとかはいいんですか？」
「ウィル！」
「は、はい」
「そういう難しいことは大人に任せておけばいいの。
あなたはミレイちゃんを案内してあげなさい」
「は、はい。母様」

やりすぎた。

さじ加減が難しいね。

「じゃぁ、ミレイ。改めてよろしく」

「・・・ぅ、うん」

家に来た日のその後（後書き）

Twitter　@nekomihonpo

家に来た日のその後のミレイ（家族？）

・・・なんか・・・頭ぐるぐるして・・・ウィルのお母さん・・・
付いていったけれど・・・
ガチャ

「ずいぶんと打ち解けたというか・・・なつかれてますね。母様」
「んふふ～。さぁ、ミレイちゃん。
お披露目ですよ～」
「・・・ぁぅ」

・・・もう頭ぐるぐる・・・

「・・・何故にメイドさんなんですか？」
「・・・ごめんなさい」
「いえいえ。謝らないでください。
本当にかわいらしいですから」
「ぁぅ・・・」

・・・今日は・・・沢山、かわいいって・・・今日はどうしたんだろう？

「ウィル専属のメイドさんにしようかと思うのだけれど？」
「「え？」」

・・・え！？え！？
・・・えっと・・・専属の・・・メイドさん？
「あら？かわいらしいメイドさんは嫌い？」

・・・また。
・・・かわいらしい・・・沢山なの。

「・・・ミレイはそれでいい？」
「・・・なんで・・・」
「ん？」
「なんで・・・してくれるの？」
「たまたまです。
たまたま・・・たまたま、ミレイが酷い状況にあるということに気がついてしまった。
偶然目にしたミレイの状況が、あまりにも酷く・・・手を差し伸べることで、自己満足・・・良心の呵責から逃れるため・・・結局、ミレイしか救われていないのに。
所詮、偽善で自己満足で・・・それでも、ミレイ1人でも・・・救うことが出来るのならいいかなって。
ミレイは・・・救われたと感じてくれるかな？
これは押しつけになってしまうのかな？」
「ぁぅ・・・ボク・・・忌み人で・・・きっと・・・みんなに迷惑・・・」
「そんな」「そんなことはないわ。ミレイちゃんは、こんなにもいい子なんだもの」

ぎゅって・・・また、抱きしめられた・・・の・・・なんか・・・もう・・・頭、ぐるぐる・・・ぐちゃぐちゃで・・・

「ぁぅ・・・ぅぇ・・・ぅぇぇぇぇ」

ボク・・・ボク・・・忌み人なのに・・・忌み人じゃない・・・って・・・こんなにも・・・優しく・・・暖かく・・・

「じゃぁ、ミレイ。改めてよろしく」
「・・・ぅ、うん」

・・・ボク・・・どうしたら・・・どうするの・・・忌み人なのに・・・

・・・暖かい食事・・・すごく・・・すごく・・・おいしかった。
・・・ふかふか・・・で・・・暖かいお布団・・・ボクが・・・こんな所で・・・寝ていいのかな？
って・・・優しく・・・いいんだよ・・・って・・・すごく・・・
すごく・・・気持ちよくて・・・夢・・・じゃなかった・・・ので・・・驚いたの。

・・・どうして・・・いいのか・・・解らなかった・・・から・・・
お部屋で・・・じっと・・・じっとしてたら・・・

コンコンッ
「！？」

コンコンッ

・・・ど、どうしよう！？
・・・どうしたら・・・いい・・・の？

ガチャ
「ミレイ？・・・起きてる？
ああ、なんだ起きてるんだね」
「・・・ご、ごめんなさい」

「ううん。謝らなくていいよ。
おはよう」
「・・・ぉ、おはよう」
「朝食に行こうか・・・まずは、着替えてからだね。
外に出ているから、着替え終わったら出ておいで」
「ぇ・・・ぁ・・・」
バタン

えっと・・・朝食・・・って言ってた。
・・・いいの・・・かな？
そうだ！？
着替えが・・・遅かったら・・・怒られちゃう。
・・・急ごう。
・・・脱いだ服・・・どうしよう・・・えっと・・・持って行けば・
・・いい・・・のかな？

ガチャ・・・キィィ
「やぁ、着替え終わったかい？」
「・・・うん」
「ああ、脱いだ服はベッドの上にでも置いておけばいいよ」
「・・・ぁぅ・・・ごめんなさい」
「うん。謝らなくていいよ。大丈夫」
「・・・うん」

・・・待たせちゃ・・・悪い・・・から・・・急がない・・・と。

「「いただきます」」
「・・・いただき・・・ます」

暖かくて・・・おいしい食事・・・
こんな・・・お日様みたいな所に・・・ボクがいていいの？
・・・忌み人なのに。

「・・・うぇ・・・うぇぇぇぇ」
「ミレイ。ミレイ。どうしました？」
「・・・ぐす・・・ボク・・・ボク・・・がんばる・・・」
「え？」
「・・・がんばる・・・から・・・メイド・・・がんばる・・・から・・・」
「あらあら。大丈夫よ。
ゆっくり・・・ゆっくり慣れていきましょうね」
「・・・ぐす・・・うん・・・がんばる・・・から」

ウィルのお母さんに・・・ぎゅっとされて・・・暖かくて・・・
涙が止まらなかったの。

家に来た日のその後のミレイ（家族？）（後書き）

Twitter　@nekomihonpo

ミレイが歌った日

「♪もるで、のすにと、へんげるたい～」

ミレイがウチに来てから、一悶着がありました。
思わず、遠い目をしてしまいますが・・・一悶着あった。
ウチではなく、世間的にだが。
ミレイの火傷跡と、母様が見た虐待の証に関して、父様が知った時・・・その時、ランカスター家に激震が走る！まさにそんな感じ。
父様と母様が暗躍（？）し、詳細は教えてくれないのだが、ウチの位がワンランクアップした。
どうも、あの孤児院・・・院長であるウラケス家が、虐待だけならまだしも、横領、人身売買、臓器売買と言った、ロクでもないことをして財をなしていたようなのだ。
国と地方行政からの資金横領・・・当然、脱税もだ。
売買だが、幼児愛好家（女児だけじゃなくて男児も）、臓器偏愛者と言った変態の金持ちを相手に、売りさばいていたらしい。
ゲスすぎる。
ミレイは、忌み人なので買い手が付かなかったようだ。
ある意味、忌み人が幸いした。

「♪じおに、かんやか、いでいやし～」

そんな事があったので、ウラケス家当主は逮捕。
ウラケス家は財産没収の上、首都、及び、首都衛星都市からの追放。
国外追放じゃないだけマシだが、財産没収されているので、どうにもならないんじゃないかなぁ？
詰んでるよね。

で、我が家は・・・と言うと、孤児院の管理運営を言いつけられ、孤児院職員の任命権、資金運営の許可、該当する土地の整備運営・・・と言った厄介事にしか思えない内容を仰せつかった。
でだ・・・任命権、運営権あたりで、家督が足りないんじゃないか？って話になって、ワンランクアップに繋がった訳だ。

「♪とりと、ふういき、かすもい～ど～」

孤児院の運営に関しては、父様と母様が厳選した職員により運営されていくことになった。
元々、あまり贅沢をする家風ではないので、増えた家督がまるまるっと孤児院の運営に回されている。
孤児院の建物も、あのボロ屋敷ではなく・・・接収したウラケス家を使っている。
一気に立派になって、喜ばれているようだ。
ま、ウチがあの家使うこともないしな。
有効活用ってモンだ。

ミレイは、1度だけ孤児院を見に行ったが、孤児院には戻らなかった。
まぁ、忌み人として、迫害されてた所に、好きこのんで戻りたいとは思わないよな。

「♪てとら、かりこり、し～りむまい～」

ミレイは・・・と言うと、まだまだ子供ということもあり、1日3刻（3時間半）程度の仕事を、ノイナに付き従っ・・・

「あら。ウィル、ご機嫌ね？」
「母様。ご機嫌という訳ではないのですが・・・ご機嫌ですか？」

「そうよ～。何か知らない歌を歌ってたじゃない」
「ああ・・・あれですか。なんでしょうね？」
「あらあら。どこで覚えてきたのかしら？」
「ミレイが・・・たまに歌ってるんですよ」
「あら？ミレイちゃんが？
それは是非とも聞いてみたいわね」
「掃除中とか・・・気分が乗ってる時に歌っていますよ」
「だいぶ、慣れたのかしらね？」
「そうですね。まだまだ・・・だとは思いますが・・・
自分が忌み人ってことをかなり気にしているというか・・・」
「そうね。忌み人では無いと思うのだけれど・・・」
「忌み人なのに忌み人じゃないってことですか？
そもそも忌み人って何ですか？
母様は、いじめられている人としか仰りませんでしたが」
「そうね。これから一緒に生活していくのだもの。
ウィルには知っておいて貰った方がいいかも知れないわね」
「教えていただけるのなら、教えて下さい。
ミレイを守る為にも・・・正しい知識が必要なんです」
「クロ・・・闇の眷属と呼ばれる者達がいるのは知っているかしら？」
「ええ。父様に教えていただきました。
動く死体や吸血を行う者達だと・・・」
「そう。彼らは、その人との違いから、恐れられ、忌み嫌われているわ。
彼らも人を食べ物や虫けら程度にしか思っていないみたいだし。
そして、彼らは、時として食料以外の目的で人を襲ったりするの」
襲うって・・・犯すってことだよなぁ。
つまり・・・忌み人とは、闇の眷属との混血・・・と言うことか。
ミレイはハーフってことなのか？

孤児院に居たのに？
母親が混血だということを言いふらしたんだろうか？
・・・それは無いな。
自分が闇の眷属に傷物にされたと喧伝するようなモンだし。
っていうか・・・子供が生殖行動に関する知識を持ってるのって・・・
・極々一般的な常識なのか？

「襲われた結果、身籠もってしまうことがあるわ」

課程を駆け抜けたな。
まぁ、詳細に説明されても・・・なんとなく気まずいし・・・適度にスルーだ。
・・・ただし、子供らしさを忘れずに！程度に。

「みごもる・・・ですか」
「ああ・・・そうね。えっと・・・子供が出来てしまうことよ」
「つまり・・・その子供が忌み人？」
「そうね。その子は忌み人と呼ばれ、差別されるわ」

そうなると、やはり、母親が喧伝しないとバレないと思うんだが・・・
・
・・・何か身体的な特徴が出るのか？

「その子には、何か特徴が出るんですか？
例えば、ツノが生えてくるとか・・・」
「そうね。そういう子もいるわ。
目が光ったり、背中に羽があったり・・・」
「じゃぁ、ミレイも！？」
「いいえ。ミレイちゃんには、そういった特徴は見られなかったわね」

ほっ。
外見的特長が無いのは良かった。
じゃぁ、何をもってして、忌み人と言っているんだろうか？
血を好む・・・様には見えないしなぁ。
要するに・・・吸血鬼ってことだろ？
犬歯が鋭かったりしてないし・・・
・・・こっちの世界の吸血鬼知らないけど。

「じゃぁ、ミレイは忌み人ではない？」
「見た目では解らない場合もあるわ。
これば っかりは、ミレイちゃんに聞いてみるか、しばらく様子を見るしかないわね」
「母様は、どう考えているのですか？」
「そうね。・・・実は見た目だけなんじゃないかしら？」
「は？」
「ほら、ミレイちゃんって、綺麗な黒髪してるでしょ」
「ええ・・・日の光でうっすらと蒼味がかった感じになりますが・・・綺麗ですよね」
「そうね。・・・ウィルは町中で黒髪の人って見たことあるかしら？」
「え？・・・さすがに黒髪くらいいるんじゃないですか？」
「いいえ。居ないわ。
少なくとも、私は見たことが無いの」
「え？」
「闇の眷属に黒髪の者が居て、黒髪の人間は、その子供と思われているわ」
「え？じゃ、じゃぁ、ミレイは、髪の毛が黒いというだけで、忌み人と差別され、虐待を受けていたと言うのですか？」
「私はそう思うの」

馬鹿な！そんな・・・そんなくだらない事で・・・

「じゃ、じゃぁ、今までも、そんな見た目がちょっと違うだけで差別され、謂れの無い迫害・・・下手をすれば、そんな理由で殺されてしまった人たちが居たかも知れないと！？」

「ええ・・・悲しいけど、そうなるわね。

本当の忌み人・・・と呼ばれる人たちも居ることは間違いないのよ」

なんだそれ！なんだそれ！

「なんだそれ！アホかッ！

髪の毛が黒いだけ？

アホかッ！

突然変異かも知れないじゃないか。

伴性遺伝で黒髪が発現した可能性だってあるじゃないか。

先祖帰りはどうだ？あれは隔世遺伝だったか？

十分に可能性があるじゃないか！？」

「ウィル・・・」

母様にそっと抱きしめられた。

母様の暖かさが・・・急速に頭を冷やす。

・・・暴走しすぎたか。

というか、考えが表に出てた？

・・・ドン引き！？

「母様・・・？」

「そうね。髪の毛が黒いだけで、ミレイにあんなことをするなんて・・・良くないわよね。

だからね・・・これからはウィルが守ってあげないとね」
「母様・・・」
3分だったのか・・・5分だったのか・・・
そっと抱きしめられたまま時間が過ぎた。

「それにしても不思議な歌ね」
「え？・・・ああ、ミレイの歌ですか・・・」
一気に話の方向を捻じ曲げてきたな。

「不思議ですか？」
「そうね。専門外だから、あまり解らないのだけれど・・・
呪印魔法の呪文に近い感じかしら」
「呪文ですか？」
「そうよ～。本物の呪文に比べると、ものすごく短いのだけれど・・・
・
言葉の感じは呪印魔法に近いわね」
「ふむ」

呪印魔法の才能持ちですかね？
どうやって確認したモンですかね。

取り敢えず、母様との会話は打ち切り。
気分転換に日課のヒールをこなすとしよう。
さぁ、ミレイはどこだ？

2階から音が聞こえるな。

ガチャ

「ミレイ～。そろそろ出かけますよ？」
「・・・ん」

こくりと頷くと、とてとてと歩いてノイエの方へ。

「ノイエ・・・ウィルと外・・・えっと・・・散歩してくる。
・・・いい？」
「そうですね。
本日の作業も終わりましたし、出かけてきていいですよ。
気をつけて行ってらっしゃい」
「・・・うん」

とてとてと戻ってきて

「ウィル・・・行く」

なんとも小動物ちっくで和むねぇ。

「じゃぁ、ノイエ。行ってきます」
「はい。お気を付けて行ってらっしゃいませ」

散歩・・・と言うか、日課のヒールだ。
前は色々と心配を掛けていたみたいだが、ミレイが来てから、一緒に出かけるということで、一応安心されているみたいだ。
お目付役って所ですかね～。
ま、忌み人ってことで、極力、町中は避けている。
なんせ、ミレイのお陰で、隠れて出て行かなくて済む。
出かけるのは楽になった。

取り敢えず、いつもの枯れ森に到着。

目印の毛糸まで移動して・・・隣の木にリサーチ、リコンディション、ヒールのコンボを喰らわす。
最近は面倒になって、範囲ヒールの練習に切り替えてる・・・そうでもしないとＭＰが枯渇状態にならない。
素直にヒールで枯渇を狙うと面倒なんだよね～。
効率よく枯渇させないと・・・ちょっと増やしすぎたか？

「ミレイ。ミレイは魔法が使えるんですか？」

どストレートに聞いてみた。
どうやって確認するか思いつきませんでしたっ！

「・・・ん？・・・ウィル・・・何を言っているの？」
「ほら。よく、歌ってるじゃないですか。
♪もるで、のすにと、へんげるたい～・・・って」
「ッ！？・・・なんで・・・知ってるの！？」
「え？いや・・・掃除の時とか歌ってますよ？」
「ぅ！！？・・・そ、そんなこと・・・ないの！？」

ここまで慌てるミレイというのも・・・斬新だな。
えっと・・・知られちゃいけなかったのか・・・恥ずかしかったのか・・・後者のようだが・・・

「じゃぁ、まぁ、歌っていませんでした」
「うん・・・うん」
「で、母様が言うには、呪印魔法みたいだ・・・とのことなのですが」
「じゅいんまほう？」
「ええ。何やら呪文に似ているそうです」
「・・・そうなの？」

「誰から習ったんです？」
「・・・えっと・・・適当？」
「適当ですか・・・ミレイがなんとなく気分で歌ってると」
「・・・なんだろうね？」
「いや・・・そう言われても困ってしまうのですが」

ふむ。どうやら思いつきのようだ。
母様が呪文っぽいって言っていたから、てっきり、ミレイが呪印魔法を使える物と勘違いしたのだが・・・

「ウィル・・・今日のヒール・・・終わった？」
「ええ。今日はこの辺で帰りましょうか」
「・・・うん」

ミレイが歌った日（後書き）

Twitter　@nekomihonpo

修正箇所

街中→町中

ストーキングされた日

季節も巡り、６歳になった。
ミレイも、我が家にだいぶ馴染んだんじゃないか？と思うのだが・・・
・
母様に振り回されている感じだ。
まぁ、何かと遠慮するので、母様が気を使って積極的に動いているためだ。
お陰で、だいぶ笑顔が増えた気がする。
・・・苦笑も増えた気がするが・・・気のせいだな。

日々の日課のヒールは、今も続けている。
木の本数は・・・いい加減数えてられない。
１５００は超えていると思うのだが・・・
範囲ヒールの練習を始めたあたりから、本数がいい加減になった。
まぁ、仕方ない。

でだ。
ここ数日、大物に取り組んでいる。
枯れ森の中心（？）にある大木だ。
直径１５メートルはあるんじゃないか？という大物だ。
・・・子供目線なので、実際はそこまで無いのかも知れないが。
で・・・ここ数日掛かってる理由なんだが・・・
とにかく根が多い・・・それに深い。
リサーチして、リコンディションするのだが、
一回のリコンディションじゃ１、２箇所が精一杯だ。
そんな訳で、地味にリコンディションをして回るという作業を繰り返している。

「異常を取り除くことを願う。リコンディション」
恐らく、最後の異常部位のリコンディションが終わる。
「ウィル・・・終わったの？」
「ああ。たぶんですけどね。
念のため、一周して確認ですね」
「・・・解った」
ぐるっと一周。
リサーチ結果に不審な点は見えない。
「さて・・・こんだけの大木です。
一発、でかいのをぶちかましますか」
「我、彼の者を、我の持てる最大の力で癒すことを願いたてまつらん。マックスヒール！」
マックス・・・要らない気もするが・・・
・・・っていうか・・・『だせぇ』
パッと思いつかなかったんだ。
しょうがないじゃないか。
後々、短縮詠唱する際に、分かり易い語彙にしておかないとバランス調整が出来ないんだよね。
なんでか知らないけど。
それはそれ。
さすがに最大ＭＰを突っ込んだヒールだけはある。
力の抜け方が半端ない。
立ってるのも億劫なので、その場に座り込む。

「ウィル！」
「ああ・・・ちょっと休めば、大丈夫です」
「・・・なら・・・いい」

これで、この大木も生い茂るかな。
さすがに、この大木が復活したら、町の人々も枯れ森が復活したの気がつきますよね～。
ま、すでに何人かは気づいてるけど。
どんだけ鈍いんだよ！
とか思ったけど・・・
それだけ、枯れ森が枯れているのは当たり前ってことだったんだろうなぁ。

「・・・ウィル！」
「ん？どうしました、ミレイ？」
「後ろ」
「・・・後ろですか」

振り返ると見知らぬフード姿の人が。
・・・女性・・・ですかね？

「やぁ、こんにちは」
「はぁ？こんにちは」

ミレイがこそこそっと私の背中に隠れる。
まぁ、人見知りだから仕方が無い。
っていうか、私も隠れたい。
なんとなく苦手な感じっぽい。

「ここは、コトナリリスの枯れた森だったと思うのだけれど・・・

間違いないかな？」
「えっと・・・枯れ森としか知らないのです」
「そっか。君たちは枯れ森と呼んでいるんだったね。
ああ、そんなに警戒しないでくれたまえ。
怪しい者じゃないよ」
「はぁ」
「私の名前はハルトティータ。ハルトティータ・トゥ・アイサノシ。
枯れ森が復活したという噂を聞いてね。
調べに来てたんだ」
「そうですか・・・それじゃぁ、僕たちはこれ」「君が復活してくれたんだね」

だね・・・ってバレてるじゃないか。
どうしたモンだろうか。
う～ん。剣呑な雰囲気ではないようだが・・・
ばっくれ方向でひとつ・・・

「えっと・・・僕たちは子供ですよ？」
「そうだね。子供だね」

ばっくれ失敗の香り。

「子供に森を復活させるなんて無理だと思うんですが・・・」
「そう。私たちは無理だと思っていた。
どうにもならないので森を見捨てた。
森は主であるコトナリリスの大樹も含め、枯れてしまった。
私たちは森の恵みも祝福も護りも・・・失い、見捨てて・・・逃げたんだ」
「・・・仕方なかったんじゃないですか？」
「そんなことは無い！

現に森は生きていた。
生きていたのに、その声に耳を貸さずに人の所為にして逃げたんだよ」
「人の所為ですか・・・」
「ところが間違っていた。
私たちの判断は間違っていたんだ。
人間の子よ」
「は、はい」
「一族に成り代わり、感謝を・・・
最大限の感謝をささげたいと思う」

バレてる上に、大げさな話になりはじめた。
なんだろう。
逃げた方がいいとしか思えない熱の帯びようなんだけど。

「い、いぇ・・・僕たちは別に・・・」
「隠さなくてもいい。
ここ数日、君たちが森を巡り、コトナリリスの大樹の病を治し・・・そして今日・・・
君の持てる力の限りで癒しを施してくれたことは解っている」

完全にバレてる・・・
っていうか、ここ数日って何だ？
どういうことだ？

「そ、それで・・・ハルトティータさん？は僕たちに何を？」
「いや。あまりにも感動したので、最大限の賛辞と・・・何かお礼が出来ないかと・・・」
「い、いぇ・・・僕たちが勝手にしたことですし・・・
それに、コトナリリス・・・でしたっけ？大樹も復活したかは怪

しいですし・・・」
「ああ、それなら大丈夫だろう。
コトナリリスの大樹に生命の息吹を感じるからね」
「生命の息吹ですか・・・」
「ああ・・・君たちは知らないのか。
エルフの中でも、一部も変り種連中は、森の息吹を感じ取ることが出来るんだよ」
「エルフの方だったんですね」
「ああ、フードをしたままだったね。
これは失礼をした」

へぇ。本当にエルフっているんだね。
それに綺麗な人だね。
やっぱ長寿なのかな？長寿なんだろうなぁ。
それはそれ。
町中じゃ見かけないけど・・・隠れてるのかな？
隠れてるというよりは、人里離れて住んでるのかな？
森の中で閉鎖的に・・・みたいな感じで。

「エルフは珍しいかな」
「そうですね・・・町中じゃ見かけたことが無い気がします」
「そうだろうね。
この森が枯れたときに、別の森へ移住してしまったからね」
「ああ・・・さっきの人の所為にしてってのは、人間の所為にしてってことですか？」
「そうだね。
君は聡い子だね。
人並み外れたヒールといい・・・
本当に不思議な子だ」
「えっと・・・僕たちが枯れ森にヒールをしていたことは黙ってい

て欲しいのですが？」
「え？そうなのかい？
せっかく、ここまで復活したのだから、大々的に触れ回ったほうがいいんじゃないかい？」
「枯れ森が復活したことに関してではなく・・・僕たちがヒールをしていたということです」
「ふむ。それでは誰からも感謝されないよ？」
「感謝して欲しくてやった訳じゃありませんから」
「それじゃぁ、ちょっと寂しいね。
・・・そうだ。これを持っててくれないか？」

ハルトティータが右耳のイヤリングを取り外す。
黄緑色をした石で出来ている。
きらきらと淡い緑がとても綺麗だ。
小指の第一関節くらいはありそうなんだけど・・・
・・・高いよね？

「そんな・・・受け取れません」
「そう言わずに持っていてくれたまえ。
そうだな。
君に預ける・・・という形ではどうかな？」
「預ける・・・ですか？」
「そう。君に預けるんだ。
もう片方は私が持ち続けるし・・・
君が、もし死んでしまったのなら、その石は返してもらう」
「そんな事が解るんですか？」
「ああ・・・これでもティータの祝福という名前持ちのイヤリングだからね」
「ハルトティータさんの名前の一部ですね」
「ああ、そうさ。私の名前の一部を持っているんだ。

つまり、私の片割れとも言える」
「えっと・・・じゃぁ、預かるだけ預かるということで・・・
もしかしたら、ず～っと死なないかも知れませんよ？」
「ははっ、それなら大丈夫だ。
ハイエルフって奴は、案外しぶといからね」
「ハイエルフだったんですか？」
「そうだよ」

いやぁ、ほんとにいるんだ。
ハイエルフ。
物語の中だけじゃないんだなぁ。
まぁ、魔法のある世界に居てなんだけど。
やっぱ、エルフの上位種族なのかな？

「エルフより偉いんですか？」
「ははははっ、年寄りになれるだけさ」
「そうですか・・・
えっと・・・名乗りがまだでしたね。
僕の名前は、ウィル。ウィル・ランカスター。
こっちの隠れてるのはミレイ。
ランカスター家の長子として、ハルトティータさんのイヤリング、丁重にお預かりいたします」
「ああ、そうか。君の名前を聞いていなかったのか。
・・・ウィル。
よろしく頼むよ。
そんな石でも貴重なんだ」
「はい。ハルトティータさんに無事にお返しすることをお約束いたします」
「じゃぁ、私はもう少し森を散策してみるとするよ」
「はい。僕たちはもう帰ります」

ハルトティータと別れる。
なんだろう・・・妙に緊張した。

「ウィル・・・お疲れ？」
「なんでしょうね。何か、妙に疲れました」
「きっと・・・ヒールの所為」
「そうですかね？
ミレイはハルトティータをどう思いましたか？」
「んと・・・おっきな人？」
「おっきな人ですか・・・」
「リリー奥様・・・みたいに優しい人」
「ふむ・・・悪い人では無さそうですがね。
まぁ、それはそれ。
このイヤリング・・・どうしたモンですかね。
僕がイヤリングをするってのも似合わないでしょうし」
「そんなことない・・・と思う」
「そうですか？ありがとうございます。
う～ん・・・鎖にでも付けてネックレスにしますかね」
「じゃぁ、今日は・・・もう帰る？」
「そうですね。帰りましょう。
ほんと、なんでか疲れましたし」
「解った・・・帰る」

ストーキングされた日（後書き）

Twitter　@nekomihonpo

ストーキングされた日のハルトティータ（フードの人）

ある日、いつものように面白くもなんともない会議に出ていたら、気になる報告があった。
アルバ・イデナ・コトナのコトナリリスの枯れた森が息を吹き返しつつあるという。
そんな馬鹿な。
一蹴するのは容易い。
だが、事実だとしたら、何が森を復活させたのか確かめねばなるまい。
エルベウルスの森でも、木が死に始めていると聞く。
コトナリリスの枯れた森での手当てが有効な手段なら、エルベウルスの森でも有効なはずだ。

馬鹿正直に、「私が視察に行く」とでも言おうものなら、猛反対を受ける。
そう・・・馬鹿正直に言えば・・・だ。
そんな訳で、数日前から、木の”うろ”に旅の装備一式を隠しておいた。、
散歩に行くと称して出かけたついでに、回収し、そのままコトナリリスの枯れた森へ向かった。

なるほど。
確かに蘇りつつあるようだ。
しかし、不思議なことに、森の周囲は枯れたままだ。
中に入ると青々と茂っている。
私たちが見捨ててしまった・・・コトナリリスの森の息吹だ。

希望を胸に、コトナリリスの大樹の場所へ向かった。
ここまで蘇っていたのだ。
大樹も蘇っているに違いない。
と、勝手に、はやってしまった。

さすがに勝手すぎた。
大樹は、私が最後に目にした時と、なんら変わらず、枯れたままだった。

ガサッ・・・ガサッ・・・
野生動物か？
咄嗟に身を隠す。

・・・子供だったか。
こんな所まで何をしに？

「ウィル・・・今日はこの大木？」
「ええ。そろそろ、こいつをやっつけようかと」

やっつける？
どういうことだ。
いくら枯れたとは言え、コトナリリスの大樹だぞ。

「まずはっと・・・不調を知ることを願う。リサーチ」
「・・・どう？」
「これは・・・やっかいですね。
木がでかすぎです・・・異常を取り除くことを願う。リコンディション」
「・・・治った？」

「一回じゃだめですね。
と、言うか、全然だめですね。
これは・・・面倒くさそうです」

大樹に対して、神聖魔法を使っているのか？
あの子らは神徒なのか？

「う～ん・・・取り敢えず、ヒールをして活性化だけしておきますかね。
ヒール！っと」

今のは・・・ヒール！？
ほとんど無詠唱じゃないか。
本当に子供なのか？
小人族の大人なのではないのか？

「やはり、何回かに分けないとだめですね。
治し終わりません」
「じゃぁ・・・今日はもう帰る？」
「そうですね。
あと2回くらいはやらないとダメそうです」

子供たちが帰っていく。
途中まで追いかけたが、町の中に入っていったので、そこまでとした。
あの様子からして、あの子・・・ヒールをしていた子が、この森を蘇らせたのか？
ざっと散策しただけでも、かなりの範囲、蘇っている。

翌日、またあの子供たちがやってきた。

前日と同じようにコトナリリスの大樹に呪文を唱えていく。
ほぼ一周したかと思うのだが、力尽きたのか、同じように帰っていく。
やはり、あの子が森を蘇らせたとしか思えない。
無詠唱のヒール、作業の手際を見るに、かなりの上級神徒なのか？
あの子は、私たち一族が、手も足も出ず、ただただ枯れていく様を見守るしかなかった森の病を治せるというのか？
どうやっても止められなかった崩壊を・・・神聖魔法で止められたというのか。
あの時に、解っていれば・・・
・・・今度会ったら、あの子に声を掛けよう。
そして、私たち・・・いや、私が感謝している気持ちを伝えよう。

今度・・・と言わず、翌日も子供たちはやってきた。
コトナリリスの大樹の様子を見回った後、その子の持てる力の全てを注ぎ込んだヒールを唱えた。
端から見ていても、その凄さに驚愕してしまう。
間違いない。
彼が・・・この枯れ果てた森を蘇らせたのだ。

「やぁ、こんにちは」
「はぁ？こんにちは」

声を掛けてみると・・・警戒された。
おかしいな。
友好的なハズなんだが・・・何がいけなかったのか。

「ここは、コトナリリスの枯れた森だったと思うのだけれど・・・
間違いないかな？」
「えっと・・・枯れ森としか知らないのです」

「そっか。君たちは枯れ森と呼んでいるんだったね。
ああ、そんなに警戒しないでくれたまえ。
怪しい者じゃないよ」
「はぁ」
「私の名前はハルトティータ。ハルトティータ・トゥ・アイサノシ。
枯れ森が復活したという噂を聞いてね。
調べに来てたんだ」
「そうですか・・・それじゃぁ、僕たちはこれ」「君が復活してくれたんだね」

会話を打ち切って、逃げようという意志が感じられたので、遮ってみた。
決して意地悪をしたかった訳じゃない。
本当だよ。

「えっと・・・僕たちは子供ですよ？」
「そうだね。子供だね」

そして、子供には似つかわしくないヒールの使い手だ。
それとも、今の子供はそんなモノなのかな？

「子供に森を復活させるなんて無理だと思うんですが・・・」
「そう。私たちは無理だと思っていた。
どうにもならないので森を見捨てた。
森は主であるコトナリリスの大樹も含め、枯れてしまった。
私たちは森の恵みも祝福も護りも・・・失い、見捨てて・・・逃げたんだ」

それこそ、森の住人としての矜持も、人間という隣人も投げ捨てて・・・

「・・・仕方なかったんじゃないですか？」
「そんなことは無い！
現に森は生きていた。
生きていたのに、その声に耳を貸さずに人の所為にして逃げたんだよ」
「人の所為ですか・・・」
「ところが間違っていた。
私たちの判断は間違っていたんだ。
人間の子よ」
「は、はい」
「一族に成り代わり、感謝を・・・
最大限の感謝をささげたいと思う」
「い、いぇ・・・僕たちは別に・・・」
「隠さなくてもいい。
ここ数日、君たちが森を巡り、コトナリリスの大樹の病を治し・・・そして今日・・・
君の持てる力の限りで癒しを施してくれたことは解っている」
「そ、それで・・・ハルトティータさん？は僕たちに何を？」
「いや。あまりにも感動したので、最大限の賛辞と・・・」
む？そうだな・・・賛辞を贈るのはいいとして・・・それでは彼らに何も為していないな。
「何かお礼が出来ないかと・・・」
「い、いぇ・・・僕たちが勝手にしたことですし・・・
それに、コトナリリス・・・でしたっけ？大樹も復活したかは怪しいですし・・・」
「ああ、それなら大丈夫だろう。
コトナリリスの大樹に生命の息吹を感じるからね」

「生命の息吹ですか・・・」
「ああ・・・君たちは知らないのか。
エルフの中でも、一部も変り種連中は、森の息吹を感じ取ることが出来るんだよ」
「エルフの方だったんですね」
「ああ、フードをしたままだったね。
これは失礼をした」
「エルフは珍しいかな」
「そうですね・・・町中じゃ見かけたことが無い気がします」

エルフが珍しいという。
まぁ、それもそうか。
この森が、枯れた森になった時に、ケンカ別れに近い状態になった。
町中にエルフが居る訳もない。

「そうだろうね。
この森が枯れたときに、別の森へ移住してしまったからね」
「ああ・・・さっきの人の所為にしてってのは、人間の所為にしてってことですか？」
「そうだね。
君は聡い子だね。
人並み外れたヒールといい・・・
本当に不思議な子だ」

この歳にして、既に賢者と言うことか。
人とは、真に不可思議で・・・面白い。

「えっと・・・僕たちが枯れ森にヒールをしていたことは黙っていて欲しいのですが？」
「え？そうなのかい？

せっかく、ここまで復活したのだから、大々的に触れ回ったほうがいいんじゃないかい？」
「枯れ森が復活したことに関してではなく・・・僕たちがヒールをしていたということです」

自分の成果を大々的に喧伝しないってのはどういう意図だろうか？
子供の身で、こんなことをしでかしたのだ。
それこそ、国を挙げて祝ってもいいくらいだ。

「ふむ。それでは誰からも感謝されないよ？」
「感謝して欲しくてやった訳じゃありませんから」
「それじゃぁ、ちょっと寂しいね」

無欲とは言え、報酬があってしかるべきだ。
私たち・・・いや、私の気が済まない。
彼らには何らかのお礼をしなければ。

「そうだ。これを持っててくれないか？」

右耳のイヤリングを取り外す。
コレならば、これからの人生に恩恵があるはずだ。

「そんな・・・受け取れません」
「そう言わずに持っていてくれたまえ。
そうだな。
君に預ける・・・という形ではどうかな？」
「預ける・・・ですか？」
「そう。君に預けるんだ。
もう片方は私が持ち続けるし・・・
君が、もし死んでしまったのなら、その石は返してもらう」

「そんな事が解るんですか？」
「ああ・・・これでもティータの祝福という名前持ちのイヤリングだからね」
「ハルトティータさんの名前の一部ですね」
「ああ、そうさ。私の名前の一部を持っているんだ。
つまり、私の片割れとも言える」
「えっと・・・じゃぁ、預かるだけ預かるということで・・・
もしかしたら、ず～っと死なないかも知れませんよ？」
「ははっ、それなら大丈夫だ。
ハイエルフって奴は、案外しぶといからね」
「ハイエルフだったんですか？」
「そうだよ」
「エルフより偉いんですか？」
「ははははっ、年寄りになれるだけさ」
「そうですか・・・
えっと・・・名乗りがまだでしたね。
僕の名前は、ウィル。ウィル・ランカスター。
こっちの隠れてるのはミレイ。
ランカスター家の長子として、ハルトティータさんのイヤリング、丁重にお預かりいたします」

おっと。そうか・・・名前も知らないままだったな。
こちらも失念していたし・・・ウィルも警戒していたのかな？

「ああ、そうか。君の名前を聞いていなかったのか。
・・・ウィル。
よろしく頼むよ。
そんな石でも貴重なんだ」
「はい。ハルトティータさんに無事にお返しすることをお約束いたします」

「じゃぁ、私はもう少し森を散策してみるとするよ」
「はい。僕たちはもう帰ります」

そうして、彼らと別れた。
本当に、あの枯れ果てた森は無くなったのだな。

2日もすると、コトナリリスの大樹が芽吹いていた。
あの枯れ果てた大樹に・・・新しい芽が・・・知らず知らずに泣いていた。
こんな感動的なことは、長い一生のうち、何度あるだろうか？
これは、もう・・・大事件だ。
急いで帰って、一族に伝えなければなるまい。

「じいや、喜べ！コトナリリスの」「一体、今まで、どこに行っていたのじゃッ！」

頭ごなしに怒鳴られた。

「そんなに怒鳴らなくても聞こえてるよ」
「しかしですな・・・お遊びが過ぎますぞ！」
「コトナリリスの森が蘇ってきているとの報告は聞いているだろう？」
「あぁ・・・あの与太話ですか・・・
あんな与太話を信じるなぞ・・・
時間の無駄ですな」
「そうでもない。
実際、蘇っているし、コトナリリスの大樹に新しい芽が出ていた」
「な、な、なんですと！？」
「・・・怒鳴らなくても聞こえてるよ」

「そんな馬鹿な事がありますかッ！」
「じいやは、私が見たことを信じられないと言うのか？」
「ぐ・・・いや、しかし・・・
あの枯れた森が蘇るなぞ・・・
どんな奇跡が・・・」
「ああ、確かに奇跡だった。
あれは賢者だな」
「賢者ですと！？」
「ああ、彼が、原因を治し、ヒールで治療して回っていたのだ」
「ヒ、ヒールですと！？」
「ああ、彼は凄かった。
あそこまでヒールが使える人となると、そうは居ないのではないか」
「人・・・人間が森を蘇らせたと！」
「うむ。そういう事だ」
「ぐ・・・人がそのような・・・
・・・ヌッ！？
ハ、ハルト様ッ！
イヤリングが片方無くなっておりますぞッ！！」
「ああ・・・いいんだ。
これは彼にあげて」「なんですとッ！？」
「いや・・・預けてきたんだ」
「あ、あ、あ、預けてですと！？」
「いいじゃないか。
もう片方があれば、居場所は解るのだし・・・」
「そういう問題ではありませんッ！
あのイヤリングは、清らかでなければならないのですッ！
それを、人間ごときなどに！」
「じいやは、そう言うが・・・コトナリリスの大樹を蘇らせてくれた恩人だぞ」

「ぐ・・・しかしですな・・・」
「私の決断に反対なのか？」
「ぐ・・・ぐぬ・・・しかし・・・イヤリングを」
「コトナリリスの大樹を蘇らせてくれた恩人に、せめてものお礼がしたかったのだ」
「ぐ・・・確かに・・・それは、そうなのですが・・・
と、取り敢えず、急いで関係各所に連絡いたしますじゃ」
「ああ・・・そういったことは任せる」

じいやが慌ただしく立ち去る。
ふぅ・・・実に疲れるご老人だ。

「ハルト様・・・声が漏れております」
「ん？・・・それはまずいね」
「しかし、よろしかったのですか？
イヤリングを人間に預けるなどと・・・」
「まぁ、あんなイヤリングでも、私との親交の証として役に立つだろう？
これから彼が人生で出会うエルフに、よくして貰えるぞ？
これでも威厳だけはあるからな」
「老い先短い人生で、どれだけ恩恵があるのかは疑問ですが・・・」
「ん？まぁ、確かに人間だから老い先は短いかも知れないが・・・」
「・・・どうも話が食い違っている感じがしますね」
「そうかい？」
「ご老人なんですよね？」
「いや？子供だよ」
「こ、子供ですか！？
賢者だというので・・・てっきり老人かと。
それはそれで驚きなのですが」
「いや。子供だったよ。

そうだね・・・人間の歳はよく解らないが・・・
学園に通う前くらいじゃないかな？」
「それは・・・また・・・子供ですね」
「そうだろう？」
「で、賢者であると？」
「子供の斬新な発想なんだろうねぇ。
まぁ、ヒールの腕前は、大人でも太刀打ちできたかどうか・・・」
「はぁ・・・賢者ですね」
「そうだろう？」
「じゃぁ、ハルト様のイヤリングに闇の連中が寄って来やすい・・・
という問題点も、何ら問題じゃないかも知れませんね」
「え？」
「え？・・・もしかして・・・お忘れだったんですか？」
「あ～・・・・・・まずいかな？」
「・・・まずいんじゃないですかね？」
「ん～・・・まぁ、そうそう、奴らが居るところに出くわすこともあるまい？」
「普通に過ごしていれば問題無いかとは思いますが・・・ちゃんと、考えてくださいよ？」
「はいはい」

ストーキングされた日のハルトティータ（フードの人）（後書き）

Twitter　@nekomihonpo

感想、評価ありがとうございます。
ご期待に添えるような文が書けるといいな。と思いながら書いていきたいと思います。ではでは。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0815z/

ヒール最高

2011年12月20日23時45分発行